

特61
742

白虛 禪腹

白隱

道禪

人師

釋著

式呼吸法

的
夜船閑話
釋

東京弘學館書店



白 隱 禪 師



(藏院王鹿都京)

大地撮來無寸土

唯斯一片破蒲團

若人坐此法王座

拔卻爾無量病根

白 隱 禪 師

凡 例

一、本書の註釋としては、天保十二年に成れる「夜船閑話講義」と稱するもの唯一書ありて、去四十年「禪と長壽法」の本文として公にせられぬ。然るに、該講義の著者は、同書中の記述の様子にて察するに、當時の漢法醫なる事殆ど疑なく、從つて醫道に關する方面の事は比較的詳密なるに拘らず、佛敎及び漢學の方面の事に至りては、其出典を示さざるもの十に七八に處れり。加之、註釋全體に涉りて、誤釋亦甚だ少からず。是れ予が敢て本氷釋を試みるに至りし所以なりとす。

一、本氷釋は、上述の「講義」を參考して、更に詳密を期したるものなれど、予の淺學なる、猶未だ其典據を明かにせざるものあり。又或は誤謬のなきを保せず。看者宜しく五十歩を

白隱禪師小傳

禪師、名は慧鶴、字は白隱、鶴林と號す。俗姓杉山氏。貞享二年十月廿五日、駿河國駿東郡原驛に生る。十五歳にして、同驛松蔭寺の單嶺傳に謁して得度し、沼津大聖寺息道に侍す。尋で美濃の瑞雲寺に至り、馬翁に參し、後四方に周遊して、諸老を訪ひ、備後福山の正壽寺よりの歸途、越後の高田英巖寺に至りて、性徹に參す。一夜恍然曉に達し、乍ち遠寺の鏡聲を聞き、豁然として大悟す。會々慧端禪師の門人宗格、禪師を携へて信濃に赴き、飯山正受菴に慧端に見えしむ。

以て百歩を笑ふなくんば幸なり。

一、本氷釋中、醫書中の古文「黄帝内經」を引く事頗る多し。其等は皆繁を厭うて唯「内經」とのみ書せり。該書は十八卷ありて、其中九卷づゝに分れて、素問經、靈樞經と云へり。されば、唯「素問」など出でたるも、同じく同書なりと知るべし。

一、本氷釋の本文は、「白隱廣錄」中のものを採らんと欲したれど、文法假名遣等、餘りに正し過ぎたるかの嫌あるを以て、主として「禪門法語集」中のものに據り、猶二三他本を以て校訂せり。本文に振假名を施せるは、讀過し易からん爲めの老婆心のみ。

辛亥八月

著 者 誌

始めて明眼の宗師を得たるを喜び、參請努力、遂に臨濟宗の正宗を明らめ、關山下の法燈を繼ぐ。爾後又東西に雲遊するや、從來既に兆せる心肺の病益甚しく、之を治せんが爲め、山城白河山中に白幽仙人を訪うて、内觀養生の秘訣を聽き、爲めに平癒する事を得たりと云ふ(此事に就ては、附録の「夜船閑話と白幽仙人」を參看すべし)。享保元年、同門の請に應じて、當時頽廢を極めたる松蔭寺に歸り、盛に宗風を振ふ。百廢爲めに一時に興り、蔚然として東海の法窟となる。明年京都に入り、妙心寺第一座に轉じ、透鱗の法嗣となる。四方の學徒爭ひ來り、道聲海内に震ふ。此より隨緣應化、四方に奔走して、半日の

閑ある事なし。寶曆八年、歸依の道俗伊豆の龍澤寺を創め、請じて開山第一祖となす。明和元年、「大應錄」を唱評するや、四來の聽衆七百餘人に達し、門弟の盛なる古來多く聞かざる所とす。同五年十二月十一日、大伴一聲遺偈に代へて松蔭寺に寂す。壽八十四。法を嗣ぐ者、東嶺、遂翁、峨山、夬龍、東巖等、四十餘員あり。實に臨濟中興の善知識とす。翌六年六月八日、勅諭神機獨妙禪師を賜ひ、明治十七年五月廿六日、勅諭正宗國師を追賜せらる。禪師兼て雜畫を好み、道歌を詠じ、畫賛を作りて人を教導す。其畫異風淡墨、童子の畫くが如しと雖も、頗る能手なり。著はす所、荊叢毒藥、槐安國語、息耕錄、開筵

普說、寒山詩闡提記聞、寶鑑貽照、毒語心經、寒林貽寶、遠羅大釜、寶鏡窟記、假名法語、辻談義、藻鹽草、邊鄙夷地語、藪柑子、兎專使稿、夜船閑話、壁生草、於仁安佐美、八重葎、四娘孝記、假名葎、左之母草、畫贊搖船、著作語錄、鍊丹秘要等、其他小品猶少からず。窟を闡提といひ、鶴林と異稱す。

腹禪呼吸的 夜船閑話 氷釋

夜船閑話序

白隱禪師著
虛白道人釋

窮乏菴主饑凍選

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾が鶴林近侍の左右に寄せて云く、

○夜船閑話 夜船の乗合にての無駄話といふ意にて、事を設けて書名とせしなり。閑話は、即ち閑話休題などの閑話なり。かんわと讀まずして、かんなと音便にて讀むが習ひなり。

斯かる類少からず、例へば弘法大師の「三教指歸」なども、さんけうしきと讀ますして、さんけうしきと呼ぶが如し。○窮乏菴主饑凍 窮乏菴の主人饑凍の意なるが、こは白隱禪師自ら斯る名を假設して、自序を作られしものなり。此假名の來所、及び何故に斯る序を作られしか等の事は、附録の「夜船閑話と白幽仙人」を見て知るべし。選とは選述と熟する文字にて、述といふに同じ。○寶曆丁丑 寶曆は、桃園天皇の御宇の年號にて、丁丑は、寶曆七年なり。即ち今(明治四十四年)を距る事百五十五年前にして、禪師の歿前十二年に當れり。○長安 京都をいふなり。長安は、もと漢唐時代の帝都の地にて、洛陽(周公の始めて都を營みし處)と共に漢土の都城なるが、吾國に於いて、古く京都を左京右京に分ち、其左京を洛陽、右京を長安と號したれば、今古名を用ひて、京都を長安と稱せしなり。○松月堂何某 松月堂は、京都の小川屋源兵衛の堂號にて、何某とは、即ち源兵衛の事なり。とかや聞えしとは、とか云ふ書肆がの意なり。○草書を裁して 急用狀を書きてとなり。駿州の松隆寺まで送りしなれば、遠くとは云ひしなり。○鶴林近侍の左右 鶴林とは、卷頭の「白隱禪師小傳」の中に云へるが如く、松隆寺の禪窟の別稱なり。禪師の號

を鶴林と云ふも、恐くは之に取られたるものなるべし。而して此文字の來る所は、松隆寺の山號を鶴林山と云へば、鶴は鶴の一種なるが故に、其禪窟を鶴林と異稱せるなるべし。近侍の左右とは、目上の人に對して直接に書を送るを失禮とすれば、其近侍せる左右の人、即ち左右に近侍せる人にまで寄せて、取次を願ふの義なり。こゝにては、禪窟に於いて禪師に近侍する所化達に寄せてと云ふなり。吾がとは、窮乏菴主饑凍自らの謂にて、吾が鶴林と云へるは、我が侍する禪窟を親みて云へるなり。

伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とかや云へる
 草稿あり。書中多く氣を鍊り精を養ひ、人の營衛をし
 て充たしめ、専ら長生久視の秘訣を聚む。謂ゆる神仙
 鍊丹の至要なりと。

○伏して承る 此句は、下の「至要なり」とより還り來るにて、所謂轉置法なり。此より下の「師豈に是を吝みたまはんや」までは、書肆松月堂よりの書翰の文言なり。○老師の古紙堆中 老師とは、禪師を尊びて云へるなり。古紙堆中とは、古反故の堆き中にとなり。○氣を鍊り精を養ひ 氣とは、人の呼吸する息を始め、五臟六腑四肢百骸に至るまで、其用をなすものを云へるにて、心臓には心の氣あり、腎臓には腎の氣あり、肺脾肝皆夫れくの氣ありて、夫れくの用をなすなり。而して氣は陰陽の中にては陽に屬すれば、形はなく、手に取らんとしても取り得ぬなり。之を鍊るとは、鍛へ固めて衰へしめざるを云ふなり。精とは、血の事なり。氣血或は血氣などいふは、即ち精と氣とを云ふにて、此の二つは、常に一身を運行して、之を養ひ立つる大切のものにて、「内經」凡例參看)に「血氣不和、乃百病變化而生」或は「人之所有、血與氣耳」なども云へるが如く、健康なるも百病あるも、皆血氣の如何に因るものなれば、此二者は、最も大切にせざるべからず。腎臓に收めたる精液は、血の精微なるものなれば、之を濫りにすれば、腎虛の病を生じ、老年に及ばずとも死亡する程の災を醸すなり。故に先づ精を養ふ事を云へるなり。○營衛をして充た

しめ 營衛とは、氣血の別名にて、氣血は其本體より名け、營衛は其用より出でし名なり。營衛の文字は、もと軍陣に關する名辭にて、大將の本陣を營と名け、士卒の陣を衛と云ふなり。「内經」に「衛行脉中、衛行脉外」とありて、血が脈、氣血の運行する筋の内を流れ行き、氣が内部の血を引率して其外を運行するにて、此状態を名けて營衛と云ふなり。されば、衛氣營血の熟字もあるなり。されど、こゝにては、全く血氣の別名として用ゐたるにて、即ち血氣をして不足する所なく充滿せしめと云ふなり。○長生久視の秘訣 「長生久視」の語は「老子」に出で、又「内經」にも取られたり。久視とは、長く世の事を視るの意にて、やがて長生といふに同じ。○神仙鍊丹の至要 神仙鍊丹は、文字通りに解釋すれば、仙人が丹藥を鍊るといふ事にて、即ち仙人が、九轉還丹とて、長生の藥を鍊る事を云ふなり。然るに、丹といふ字には、元來二義ありて、一は茲に謂はゆる丹藥の丹にて、不老不死の藥を云ひ、一は氣海丹田の丹にて、即ち心臓(精しくは上丹田のみ)を云ふなり。然るに、心臓の氣を鍊る事をも鍊丹と云ひて、其名稱全く仙藥の鍊丹に等しく、而かも兩者いづれも養生長生する所以なれば、兩者常に通じ用ふるなり。されば、こゝも禪家の鍊氣

内觀の意に用ひたるなり。猶後段「仙人還丹の秘訣」とある用法、及び「氣海丹田」の條見合すべし。即ちこゝは「夜船閑話」に記しある事は、世人の謂はゆる鍊氣内觀（後段に詳なり）の至要秘訣なりと承れりとの意なり。

是の故に、世の好事の君子、是を思ふ事、荒旱の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶、竊かに傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して、人をして見せしめず。天瓢空しく櫃にをさめて匿したるが如し。願くは是を梓に壽ふして、以て其の渴を慰せん。聞く、老師常に人を利するを以て老後を樂みたまふと。若し夫れ人に利あらば、師豈

に是を吝みたまはんやと。

○好事の君子 好事とは「孟子」に「好事者爲之也」とあるに出で、或一事を片より好むことといふなり。是を思ふとは「夜船閑話」を得たく思ふなり。○荒旱の雲霓の如し 是も「孟子」に「民望之若大旱之望雲霓也」とあるに出でたるにて、茲に荒旱と云ひ換へたるも、畢竟大旱といふに等しく、荒は荒凶の荒にて、田畑を荒廢せしめて凶作ならしむる意なり。雲霓は、雲と虹となるが、雲や虹は、雨を持ち來すものなれば、荒旱の時には、雲や虹をも望み喜ぶ、其の如しと云ふなり。○雲水の徒侶 豐干禪師の詩に、「一身如雲水、悠々任去來」とあり、「虛堂錄」に「尋常雲水家」とあるが如く、僧の世に處する、行雲流水の去住不定なるが如きものなれば、行脚僧を名けて雲水と云ふなり。徒侶とは、徒輩といふに等しく、ともがらの義。○天瓢空しく櫃にをさめて 天瓢は、「講義」に「天瓢の事、寔と申しがたし。列仙傳かに、仙人瓢を大切の寶物とせし事ありたりと覺ゆ」とあれど、今其確かなる出典を得がたし。されど、此句は「論語」に、「有美玉於斯、韞椞而藏」とあるに由れ

るものか。○梓に壽ふして、梓は古名をあづさ、新名をかめがしほ、又はあかい、しいと云ひ、漢土にて版木に用ひし木なり。されば「康熙字典」に「俗謂銀文書於板曰梓」とあるが如く、後には如何なる木に彫刻すとも、凡て之を梓と稱するに至れり。但し一説に、梓は「埤雅」に「梓爲百木長、故呼梓爲木王」とあるが如く、木王の稱あるが故に、實は木質柔軟にして、版木の用に堪へざれども、文書を良材に刻するの意を以て、此稱ありとも云ふ。壽ふしてとは、版木に彫りて、永久に傳はる如くすとの意なり。○渴を慰せん、此書を得たしとの渴望を満さんとなり。渴は饑渴と熟すれば、前の荒旱云々の句に照應せるなり。○吝みたまはんや、此書を版行する事を吝みて、草稿を貸與せられざる如き事あらんやとなり。

二虎含み來つて師に呈す。師微笑として笑ふ。此において、諸子舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の腹中に葬らる

ものの中に過ぎたり。諸子即ち訂正傳寫して、既に五
十來紙を見る。即ち封裏して以て京師に寄せんとす。
予が馬齒一日も諸子に長たるを以て、其の端由を書せ
ん事を責む。予も亦辭せずして書す。

○二虎含み來て、二虎とは、古へ漢土に、華林和尚といふ僧ありて、虎二頭を大空小空と名けて召し使ひたるを云へるなるが、茲にては禪師を華林和尚と見立て、弟子を彼の二虎に譬へて云へるなり。但し必ずしも二人といふ意に取らずともよし。含み來てとは、書肆よりの書状を持ち來りての意にて、虎と云へるより、獸に縁ある語を用ひて含みと云へるなり。○微笑として笑ふ、微笑すといふに同じ。即ち迦葉尊者の釋尊の拈華に對する微笑の如く、微笑の中に承諾の意を示し、なり。○蠹魚の腹中に葬らるるもの、蠹魚は、紙魚とも稱し、書物を食ふし、みといふ虫なり。即ち書櫃中の「夜船閑話」の草稿の半以上は、紙

魚に食まれてありきとなり。○訂正傳寫して 他の人の嘗て傳寫せるものなどか借り來りて、其に對校して今譯體より取り出せる蝕める草稿を訂正傳寫せる意なるべし。五十來紙の來は、音調を助くる助辭として此字を用ふる事あれば、其れなるべし。○即ち封裏して即ちは、即ち訂正傳寫の即ちと共に乃ちとあるを正しとすべく、その意。封裏は、封じつゝみての意なり。○予が馬齒一日も諸子に長たる 馬齒とは、馬齒又後段に「馬年」とあるに同じく、己が年齢を謙遜して云ふ語なり。是れ馬は、一年毎に其齒の數或は形狀等に變化ありて、其齒を見て其齡を知り得ればなり。「和漢三才圖會」に「馬三十二歳、以齒知歳」とて「一歳駒齒二、二歳齒四、三歳齒六、四歳成齒二、五歳成齒四、六歳肉牙生、七歳角區缺、八歳盡區如一、九歳咬下中區二齒日、十歳同四齒日(中略)、自二十七歳次第齒白、至三十二歳上下盡白」とあり。予とは鐵凍自らなり。一日も諸子に長たるとは、「論語」の「以吾一日長乎爾、勿吾以也」の句に依りたるなり。○端由 事物の糸口故由といふ事にて、由緒といふに同じ。即ち「夜船閑話」といふ書の草稿が、如何にして成るに至りしかの由緒を書せよと諸子の責むれば、予も亦辭せずして書すること以下の如しとなり。

云く、師鵠林に住する事大凡四十年、鉢囊を掛けしより以來、雲水參支の布衲子、纔かに門閭に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を滋しとして、辭し去る事を忘るゝ者、或は十年、或は二十年、鵠林々下の塵となる事も、亦總に顧みざる底あり。

○鉢囊を掛けしより以來 鉢囊とは、托鉢の米を入るゝ鐵鉢及び頭陀袋をいふなり。之を掛くるとは、一寺の住職となる事にて、茲は禪師が松蔭寺の住職となりし以來といふなり。○雲水參支の布衲子 雲水は、前述の如く一所不住の義にて、行脚僧を云ひ、參支とは、參禪と云ふに同じく、禪學を受くる事、布衲子とは、布衲即ち布の衣を着たる所化といふ義、即ち諸國を行脚して參禪すべき良師を求め歩く所化衆がといふ意なり。衲子はのつすと讀

むが常なり。○纒に門闥に跨れば一寸たりとも松蔭寺の門のいきぬを跨ぎて内に入ればとなり。○毒涎を甘なひ 毒あるふだれとは、禪師の教の峻嚴にて堪へ難きを云ふ。而かも其毒涎を甘しとしてといふにて、即ち嚴烈なる教も忝しと思ひてとなり。○痛棒を滋しとして 痛棒は、禪家に常に用ふるものなり。其棒にて痛く鞭たる事をもつらしと思はず、食物ならば口に食ひて旨しと思ふが如くに、其痛棒を有り難しと思ひてとなり。○鶴林々下の塵となる事も 鶴林の語より林下と云へるにて、林下とは樹下と云ふが如く、意は唯松蔭寺のと云ふに等しく、又林下と云へるより塵となるとも云へるにて、塵となるとは、死亡すといふ事なり。總には、總てといふに等しく、底ありは、程なりと云ふに等し。即ち此段は、禪師の誠實なる指教に、參學の所化衆も深く歸服して、松蔭寺にて相果つとも厭はじと思ふ程なりとなり。

盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各々東西五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院破廟、借りて以て菴

居の處として清苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投ずる者は菜葉麥麩、耳に觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は嗔拳痛棒、見る者頰を攢め、聞く者肌に汗す。鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。

○叢林の頭角 叢林とは、禪僧の集合して道を學する所、頭角とは、もと「嶄然見頭角」の句に出で、衆中に傑出せる者を云ふ。即ち叢林の頭角とは、禪僧中の俊秀といふ事なり。○四方の精英 四方の國々のよりぬきの人々といふ意なり。松蔭寺へ集り來る僧は、皆是の如き人のみなりとなり。○舊舎廢宅老院破廟 舊舎は古家、廢宅は廢れ家、老院は古寺、破廟は破れ社なり。松蔭寺に居り切れれば、是等の如き廢物を借りて宿所に當て、其中に

居りて困苦研學すと成り。○朝艱暮辛晝餒夜凍 朝夕に艱難辛苦し、晝夜に餓凍えてとなり。即ち所化衆の衣食の資は、唯托鉢行乞にあるのみなれば、自然不足不自由勝にて、窮乏饑凍の苦を嘗むとなり。○菜葉參蓼 野菜と參の屑となり。蓼は參の屑皮なれば、茲にては屑參の意なるべし。○熱喝垢罵 烈しき叱言、またなき叱言の意にて、禪師より烈しく叱喝せらるゝを云ふなり。○嗔拳痛捧 嗔拳とは、怒りて殴る事なり。即ち禪師より骨髓に徹する如き鐵拳や痛棒を受くとなり。○魔外も亦掌を合せつべし 魔外とは、惡魔外道の略なり。掌を合とは、合掌念佛する事にて、即ち哀に堪へざる有様を見て、惡魔外道も、思はず合掌念佛する程なりとなり。

其の初め來る時は、宋玉何晏が美貌有りて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして、恰も杜甫賈島が形容枯槁、顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤

畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂み有りてか、片時も湊泊する事を得んや。

○宋玉何晏が美貌 宋玉は、郢の人にて、屈原の弟子なり。楚の大夫となる。美丈夫の稱あり。彼れの「好色賦」の序に「臣東家之子、增之一分則太長、減之一分則太短、著粉則太白、施朱則太赤。然此女登牆窺臣三年、至今未許也云々」とあり。此事「十訓抄」にも出でたり。何晏は、三國時代の宛の人にて、魏の公主(公主とは天子の女)を尙り、頗る美貌あり。少くして才の秀でたるを以て名を知られ、曹爽引きて散騎侍郎となす。侍中尙書に遷り、爵列侯を賜ふ。○杜甫賈島 杜甫は、唐の襄陽の人、少陵と號す。父閑、奉天の令となり、遂に杜陵に居る。甫進士に擧げられて第せず、因りて長安に遊び、玄宗の朝に賦を奏す。帝之を奇とし、集賢院に待詔せしむ。肅宗立ちて右拾遺に拜す。後官を棄て、秦州に

客たり。薪を採り、椽粟を拾ひて自ら給す。是れ茲に枯槁憔悴の例に引かるゝ所以なり。忠君憂國の情詩歌に表はる。世に名けて詩史と號す。賈島は、唐の范陽の人なり。初め僧となり、無本と號せしが、其の詩文を能くするを以て、韓愈の知る所となり、還俗して進士に擧げられ、長江の主簿となり、後普州司倉參軍を以て司戸に遷り、未だ命を受けずして卒す。其の詩を作るや苦吟する事甚し。是れ茲に憔悴枯槁の例に引ける所以か。○形容枯槁顔色憔悴 屈原の「漁父辭」に「顔色憔悴、形容枯槁」とあるを、茲には轉換せるなり。形容枯槁とは、からだのやせかれたるを云ひ、顔色憔悴とは、かほいろのやせおとろひたるを云ふなり。○屈子に澤畔に逢ふが如し 屈子は、楚の屈原の事なり。楚の同姓にして、懷王之左徒となる。博聞強志、治亂に明かに、辭令に嫻へり。王甚だ之に任ず。襄王の時、讒に遇ひて江南に遷さる。原江濱に至り、髪を被りて澤畔に行吟す。顔色憔悴し、形容枯槁す。乃ち懷沙の賦を作り、汨羅に投じて死す。扱こゝの意は、初めには宋玉何憂の如き美貌なりし人も、後には澤畔に行吟せる屈原の如く瘦せ衰へ、或は杜甫賈島の瘦せ衰へたるが如くなれりとなり。○參支軀命を顧みざる 參支は、前に云へる如く禪學を受くる事。

軀命とは、身命といふに同じ。○勇猛の上士 勇猛は、勇猛精進と熟し、難行に打勝つ勇氣あるを云ひ、上士とは、優れたる人の事なり。○片時も溘泊する事を得んや 溘泊とは、逗留或は滯留などいふに同じ。勇猛の上士ならずんば、片時も滯留する事能はずとなり。是の故に、往々に參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癖塊痛、難治の重症を發せんとす。是を憐み是を愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ら忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞て、是に授くるに内觀の秘訣を以てす。

○參窮度に過ぎ 參窮は、參學窮極するの意にて、禪學の奧秘までも窮めんとする事、其

れが過度なるなり。○清苦節を失する 清苦は、上述の如く、困苦研學するにて、修行に凝る事を云ひ、其れが中庸を失ひてはげしきに過ぐるなり。○肺金いたみかじけ 肺金とは肺臓の事にて、五臓を五行に當つれば、肺は金、心は火、肝は木、脾は土、腎は水に當るを以て、肺金、心火、肝木、脾土、腎水と云ふなり。而して、肺臓は「五臓之華蓋」又は「藏之長也」とも云ひて、五臓の最上に位し、一身の氣を司れり。故に、參窮清苦する事過度なれば、先づ肺氣を勞らしむ。かじけとは、勢の衰ふる事を云ふなり。○水分枯渴して然るに、「氣水合一」と云ひて、氣衰ふれば水も潤るゝ理あり。故に肺金痛みかじければ、水分も潤渴するなり。○疝癖塊痛 疝癖とは、疝氣疝瘕など云ふに同じ。疝とは「氣積如山故曰疝」とあつて、氣の滯りより生ずる病なり。癖とは、もと痼癖など云ふが如く、病の固まりて動かざるを云ふなり。塊痛とは、氣水の滯りて痛疼を感ぜしむる局部の痛のなり。○不豫の色 此句は「孟子」の「夫子若有不豫色然」とあるより出づるにて、豫は悦の義、即ち悦ばざる顔色の意なり。○忍俊不禁にして 忍俊の文字意味をなさず。「講義」に、忍拒の誤寫なるべし。峻拒といふ熟語あれば、もと忍拒とありしが、拒を峻に誤り、峻字ま

た俊字に誤りて、遂に忍俊となりしものと云へり。今此説に従ふ。不禁は、禁する能はずの義、即ち禪師が始めより忍耐峻拒して、秘して云はざらんとせし内觀の秘法も、所化衆の病苦を見るに及んでは、同情憐愍の念禁する能はずしてとの意なり。○雲頭を按下し 此句は、次の「老婆の臭乳を絞つて」といふ句と共に、爲し難き事を強ひてなすといふ意の禪語なるべし。雲頭とは雲のかしら、按下とはなで、おろすの意なるべし。即ち天なる雲を手を以てなで下すは、人間として普通には出來ざる事なり。其れをも強ひてなすとの意にて、仕にくき事を強ひてなすの意を含めたるものなるべし。○老婆の臭乳を絞つて 上述の如く、禪語なるべし。臭乳とは、臭氣ある乳汁にて、老婆なれば、乳汁ありとも臭氣あるべしとの義にて云へるなるべし。扱老婆には到底乳汁のなきものなるを、其れをも強ひて絞り取つてと云へるにて、此句も、前述の如く、仕にくき事を強ひてなす事を云へるなるべし。即ち以上雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つてとは、内觀の秘訣を所化衆に授くる事は、禪師にはなかく思ひ切りて爲し難き所、惜しむに餘りある事なれども、強ひて割愛して秘授せんとの義なるが如し。○内觀の秘訣 内觀とは、心を靜めて自己其者を明細

に觀察するの義なるが、其結果としては、養生長壽の奇功を得べきものなり。本書は即ち此禪的長壽法を述べたるものにて、本書の説く所に由れば、此内觀法は、禪師が白河の白幽仙人より傳へられたるものなりと云ふ。精しくは本文及び附録を熟讀して知るべし。

乃ち云く、若し是れ參禪辨道の上士、心火逆上し、身是勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是を治せんと欲せば、縦ひ華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はじ。

○參禪辨道の上士 參禪とは、前に參玄とありしに等しく、禪學を學ぶ事、辨道とは、禪道を辨するの義にて、參禪と云ふに等し。上士とは、前の「勇猛の上士」とありし所に述べたり。乃ち云くより以下は、内觀の法の大略を説けるにて、本文にあるものを、此序文にも取

りて約説せるなり。○心火逆上し 心火とは、心臓の事なり。五行に當つれば火に當る故心火といふこと前述の如し、又「心藏神」と云ひて、工夫思察觀法等は、皆此藏に係る事なれば、其參禪辨道の必要なる心臓の氣が若しも逆上しと云へるなり。○五内調和せざる五内とは、肺心肝脾腎の五臟、及び大腸、小腸、膽、胃、三焦（本文中に釋すべし）、膀胱の六腑をおしなべて云ふなり。是等のものが、互に能く調和せざる事あらんにばとなり。○華陀扁倉 華陀と扁鵲と倉公との三人の名醫なり。華陀は、漢の沛國譙の人なり。經史に通じ、養性の術を悟る。年將に百歳ならんとして猶壯者の容あり。時人以て仙となす。方藥に精しく、處劑數種に過ぎず。針藥の及ばざる所は、腹背を割き、腸胃を斷ち、其疾を除きて之を縫ひ、つくるに神膏を以てすれば即ち癒ゆ。曹操頭風を苦み、陀を召して之を鍼せしむ。手に隨ひて癒ゆ。後召せども至らず、因つて害せらる。扁鵲は、戰國の世の名醫にして、渤海郡鄭の人なり。少き時、長桑君、鵲の常人にあらざるを知り、語りて曰く、我に禁方あり、公に傳與せんと。乃ち其懷中の藥を出して鵲に與ふ。鵲遂に名醫となり、垣の一方の病人を視て、盡く五藏癥結を見るに至る。齊の桓公を見て、病ありと云ふ。侯

自ら知らず。後果して卒せり。倉公は、齊の太倉の長、臨菑の人なり。少くして醫の方術を好む。同郡元里の公乘陽慶、七十餘にして子なし。悉く禁方を以て倉公に與へ、黃帝扁鵲の脈書を傳ふ。五色病を診し、人の死生を知り、嫌疑を決し、治すべきを定む。藥論亦甚だ精し。倉公之を受くる三年、人の爲めに病を治し、死生を決して驗多し。

我に仙人還丹の秘訣あり。爾が輩試に是を修せよ。奇功を見る事、雲霧を披きて皎日を見るが如けん。若し此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず、眼を合せざる以前に向つて、長く両脚を展べ、強く踏みそろへ、一身の元氣をして、臍輪

氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。

○仙人還丹 前に「神仙鍊丹」とありし所に云へるが如く、此句は、文字通りには、仙人が丹藥を鍊るの義なれど、此書にては、鍊氣内觀の義に用ひたるなり。○奇功 不思議の効驗なり。○秘要 秘訣といふも同じ。○工夫を抛下し 思慮を抛ち止めてとなり。○話頭を拈放して 頭の字は軽く添へたる迄なり。人との談話を斷ち止めてとあり。○熟睡一覺能く睡りて後目を覺せよとなり。○一身の元氣 五臟の氣凡てを云ふなり。但し元氣といふに二種あり。先天の元氣、後天の元氣是なり。先天の元氣とは、父母より受けたるもの、後天の元氣とは、生れたる後に受くるもの是なり。こゝは先天後天をすべて云へるなり。○臍輪氣海丹田腰脚足心 臍輪とはほぞ、氣海とは、上氣海下氣海に分れ、上氣海は肺臟、下氣海は臍下より陰處までを云へり。丹田とは、此も二つに分れ、上丹田は心臟 下丹田は臍下一寸、一寸五分、二寸、三寸の處をおしなべて云へり。こゝの氣海丹田とは、下氣海

下丹田の謂にて、即ち臍下の處を云ふなり。腰脚とは腰と足、足心とは足の裏の土つかすなり。即ち長く兩脚を展べと云へるよりは、内觀鍊氣の法を述べたるにて、心肺等上部の氣も、凡て之を臍下より足心の間に落ちつかせ充たしめて、時々以下の如き内觀法を成すべしと云ふなり。精しくは本文を見合すべし。

我が此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目何の鼻孔かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家郷、家郷何の消息かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説くと、打返しく常に斯の如く忘想すべし。

○本來の面目 此語は、禪家第六祖慧能の創語にして、本よりの本性といふ義なり。面目とは、もと顔の事なれども、顔は最も能く人の本性を表はすものなれば、本性の意に用ふるなり。○面目何の鼻孔かある 何の鼻孔かあるとは、鼻孔なるもの有るなしとなり。元來鼻の孔なるものは、呼吸の通ふ所なれども、呼吸は先天の氣にして、鼻孔はなくとも先天の氣は存する筈なり、是れ本來の面目なりとなり。即ち我が此氣海丹田と云へるより此迄の意は、氣海丹田腰脚足心等は、總て我が先天の本性にて、先天の本性に鼻孔などのあるべき筈なく、鼻孔などのなきが先天の本性なりと云ふなり。扱この一段は、内觀法の四則を述べたるにて、今述べたるは其第一則なるが、四則共同し句法を用ひ、其語辭には不同あれども、其義理は同じ事なり、○本分の家郷 本分は、本來といふに等しく、家郷とは生れ故郷なり。○家郷何の消息かある 消息はたよりにて、何のたよりもなしとなり。即ち此第二則の意は、我が此氣海丹田等は、總て我が先天の家郷なれば、先天の故郷其者に消息たよりのあるべき筈なし。其消息たよりのなき所が即ち先天の家郷其者なる所以なりと云ふなり。○唯心の淨土 「三界唯一心、心外無別法」の理を以て、西方の淨土を觀念

し、吾が一心の外に彌陀もなく浄土もなし、吾が心即ち浄土なりと悟達するをいふ。○浄土何の莊嚴かある 莊嚴とは、浄土の美しきかさりを云ふ。即ち其かさりなどいふものはなしとなり。此第三則の意は、我が此氣海丹田等は總て是れ唯心の浄土にて、我が心即ち浄土なれば、別に浄土の莊嚴といふものあるべき筈なく、唯先天の心即ち浄土あるのみと云ふなり。○己身の彌陀 是も唯心の浄土といふが如く、己が身の外に彌陀なく、己が身即ち彌陀なりと悟達するをいふ。○彌陀何の法をか説く 何の法をも説かずとなり。此第四則の意は、我が此氣海丹田等は總て是れ己身の彌陀にて、即ち氣海丹田等の總てなる我が身が即ち彌陀其者なる以上は、別に己れ以外に在つて法を説く彌陀なる者あるなしと云ふなり。以上の四則は、畢竟するに、一身の元氣が氣海丹田の間にをさまれば、即ち我が本來の面目日本の家郷に立ち返り、浄土も彌陀も我が身に具足して、外に求むべきものなきに至るなりと云ふなり。○妄想すべし 妄想とは、假想などいふ程の意にて、しばらく然か觀想すべしといふ意なるべし。

忘想の功果積らば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間

に充足して、臍下瓠然たる事、未だ篠打せざる鞠の如けん。恁麼に單々に忘想し將ち去つて、五日七日乃至二三七日を経たらむに、従前の五積六聚氣虚勞役等の諸症、底を拂つて平癒せずんば、老僧が頭を切り將ち去れ。

○臍下瓠然 臍下瓠の如くに張りて力あるを云ふ。○篠打せざる鞠 蹴鞠に用ふる鞠は、皮にて造れば、之を竹にて打ちて柔かくするを篠打すといふか。されば、篠打せざる鞠の如けんとは、未だ固きまゝの皮にて、篠打せざる鞠の如く、固く張り詰めたるが如しとの譬喩なり。○恁麼に單々に妄想し將ち去つて 恁麼は、梵語を音譯せる語にて、如是の義なり。甚麼、什麼、恁麼、與麼なども書けり、單々には、ひとへにの義にて、專一にと云

ふなり。將ち去つては、助語なり。妄想し將ち去つては、妄想してといふに同じ。○二三
 七日 二七日乃至三七日の義にて、十四日乃至廿一日なり。○五積六聚氣虛勞役 五積六
 聚とは、五臟六腑の氣の滯りにて、即ち積氣の事なり。氣虛とは、心氣の衰への義にて、
 今日の神經衰弱に當れり。勞役とは、肺脾の勞れにて、今日肺病といふものなり。○老僧
 が頭を切り將ち去れ 老僧とは、禪師自ら云ふなり。將ち去れば、例の助語にて、切り將
 ち去れば、唯切れと云ふに同じ。上段の「若是參禪辨道の上士」と云ふより此處迄は、禪師
 が内觀の秘訣を授けんとて、所化衆に語られたる詞なり。

此に於て、諸子歡喜作禮して、密々に精修す。各々悉
 く不思議の奇功を見る。功の遲速は、進修の精麤に依
 るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇功を讚嘆
 して休まず。

○歡喜作禮 作禮は、禪師に向つて拜禮するなり。○密々に精修す 内々に内觀の法を出
 精修行すとなり。○進修の精麤に依る 進修は、自ら進んで修行する意なり。精進修行と
 いふに同じ。精麤は、精しきとあらきと云ふにて、修行の仕方の一なる専一ならざ
 ると云ふなり。

師の曰く、爾が輩、心病全快を得て以て足れりとする
 事勿れ。轉た治せば轉た參ぜよ。轉た悟らば轉た進め。
 老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦諸
 子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟
 すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如かじ早く
 死して此の革囊を捨てんにはと。何の幸ぞや。此の内

觀の秘訣をつたへて全快を得る事、今の諸子の如くならむとは。

○轉た治せば轉た參ぜよ。轉たは愈の意、心病愈治せば愈痊禪せよとなり。○轉た悟らば轉た進め。愈悟る所あらば愈勇猛精進せよとなり。轉た進めの進めは、前の進修の進に對せり。○尋常こゝにては、常にの意。○革蕪。革にて成れる蕪といふ義にて、人間のからだを云ふ。「後漢書」に「天神遺以好女浮屠曰此但革蕪盛血遂不昞其守一如此乃能成道」とあるなどの如し。○此内觀の秘訣をつたへて。白河の白幽子より傳受せる由なり。○諸子の如くならむとは。一本に「諸子の如し」とあり。今善しと思へる方に従ひつ。此段は、禪師自らの經驗に就いて語り出せるなり。次下に續く。

至人の云く、此は是れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歳なるべし。其餘は計り定むべからず。

予即ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年、心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ゆ。

○至人「莊子」に「至人無己、神人無功、聖人無名」とありて、道を修むる事の至極せる人を云ふ。真人、達人などいふも同じ。こゝにては、白幽子を尊びて云へるなるべし。○中下は世壽三百歳。中下とは、修行の力によつて、人を上中下の三品に分ち、其上品は除きて、餘他の中品及び下品の人へと云ふなり。中下品の人にては、内觀の神術を行へば、世にある壽命三百歳は保つべしとなり。○其餘は計り定むべからず。其餘とは、前にしばらく除きたる上品の人を云ふなり。上品の人は、三百歳は愚かの事、其れ以上幾百年を保つかは計り知るべからずと云ふなり。○心身。普通は身心と用ふるを、轉換して心身となせるは、心を主として云へるなり。

此に於て、重ねて心に竊かに謂へらく、縦ひ此の眞法

を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、鐵拐、張華、費長が輩を見ず。如かじ、四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行じ、虚空に先ちて死せず、虚空に後れて生せざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。

○彭祖が八百の歳時 彭祖は、顓頊の玄孫にて、堯より夏殷を経て周代に至れる人にて、

壽八百歳を保ちたる仙人なり。少くして恬靜を好み、唯神を養ひ生を治むるを以て事とす。周の穆王一日祖の賢明なるを聞き、召して大夫と爲さんとす。彼伴つて疾と稱して仕へず。専ら水晶雲母糜角を服して、長命の術を計る。一美女あり、常に輕車に駕して祖を訪ね、道を聞いて之を穆王に教ふ。王大に喜び、此法を秘密にせんと欲し、祖の道を授受する者を殺し、更に祖を捕へんとす。祖去つて行く所を知らず。後門人某、流沙河の西に於いて祖に會せりと云ふ。○頑空無智の守屍鬼 頑空は、頑固にして智の空乏せるを云ふにて、頑迷などいふに同じ。守屍鬼とは、屍を守る鬼の意なるべし。「正庵法語」に「守藏の窮鬼」の語も見えたり。されば守屍鬼とは、生きながら屍の番をする窮鬼の如き人間といふ事にて、何の價値もなきやくざ者といふ義なり。行尸走肉などいふも略同じ。ならくのみは、なるのみの延音なり。禪書の慣用語なり。○老狸の舊窠に睡るが如し 窠は、穴中の窠なれば、舊窠とは、古巢といふ義。古狸が古栖に睡るが如しとは、何事をも爲し能はざるもとの譬喩なり。○葛洪鐵拐張華費長 葛洪、鐵拐、費長の三人は、共に仙術を得たる人にて、張華は道術を得たる人なり。葛洪は、句容の人、抱朴子と號す。少くして學を好み、

儒學を以て知らる。又神仙道術を好み、其秘奥を得たり。晋の成帝の時、散騎常侍大著作に任ぜられたれども就かず。交趾に丹砂を出すと聞き、請ひて勾漏令となり、子姪を携へて廣州に至る。刺史鄭嶽堅く留めて聽さず。乃ち羅浮山に止りて丹を煉り、山に在ること七年、遂に「抱朴子」を著し、年八十一にして羽化登仙す。「神仙傳」も亦彼が著す所なり。鐵拐は、少くして既に道を得、某山の巖穴に在りて修練す。性剛壯にして、容貌魁偉なり。老子一日宛丘と共に彼を訪れて、仙道の秘訣を傳ふ。拐或時老子を華山に訪れんとし、弟子に囑して云く、我が魂は今去れども、魄は留めて形骸にあり。七日を出でずして、此形體を動かすべからずと。弟子母の大患に赴かんとし、六日にして彼の形骸を火葬に附して去る。拐の遊魂七日にして歸來すれども、己が形骸は在らず。乃ち路傍の乞丐男の屍に宿る。是より彼の形態跛して且つ醜となる。張華は、晋の范陽方城の人、學業博達、圖緯方技の書詳覽せざるなし。吳を伐つ功によりて廣武侯に封ぜらる。後趙王倫の怨む所となりて害せらる。年六十九。「博物志」は其著す所なり。初め吳の未だ滅せざるや、斗牛の間に紫氣あり。道術者皆思へらく、吳當に強盛ならんとす。伐つべからずと。華獨り然らずと

なす。吳平ぐるに及びて、紫氣愈明かなり。華、豫章の雷煥の緯象に達するを聞き、煥を要して其言を聞き、寶劍の精上りて天に徹するを知る。煥龍泉太阿の二劍を得、一を華に與ふ。華誅せられて劍の所在を失ふ。後、煥の子、彼の二劍一所に合し、且つ化して兩龍となるを見る。而して其合すべきは張華の先見にして、化すべきは先君(煥)の豫言たりしなり。費長は、費長房の略なり。長房は、漢代汝南の人、市長たり。市中に一老翁の藥を鬻ぐあり。夜は一箇の壺中に入りて寢る。長房樓上より望みて之を知る。長房彼の老翁を訪れ、共に引かれて壺中に入れば、殿堂ありて美酒佳肴を陳ぬ。共に飲み出づ。後老翁己が天界の仙なるを明し、共に行かん事を勸む。長房老翁に従つて深山に入り、仙行を修す。遂に堪へずして歸らんとするや、老翁彼に地上の鬼神を驅使するの仙符を與ふ。長房仙符によりて衆病を治し、且つ鬼神を驅使す。彼又縮地の術を行ふ。後仙符を失ひ、惡鬼の爲めに殺さる。即ちこの意は、長生すとも一箇の守屍鬼に等しと云へるは何の故ぞとならば、彼の仙術道術に通じたる人と雖も、今日迄は長生する事能はず。然れば、長生といふ事のみが價值あるにあらず、長生すると共に佛道を修し化度をなしてこそ價值はあれと云ふに

て、以て内觀はやがて禪學を學ぶを本義とする旨を明したるなり。即ち前に「轉た悟りば轉た進め」と云ひ、後段に「内觀と參禪と共に合せ並べ貯へて」と云へると對觀すべし。

○四弘の大誓を憤起し 四弘の大誓とは、諸佛菩薩の通願たる四弘誓願を云へるにて、第一に衆生無邊誓願度 即ち無量無邊の衆生を濟度せんとの誓願、第二に煩惱無盡誓願斷 即ち無量無邊の煩惱を斷盡せんとの誓願、第三に法門無盡誓願學 即ち無量無邊の法門を學知せんとの誓願、第四に佛道無上誓願成 即ち無量無邊の佛道を證悟せんとの誓願是なり。憤起とは、猶奮起といはんが如し。○菩薩の威儀を學び 菩薩とは、己は未だ成佛せざれども、四弘誓願を發して、六度の行を修し、上菩提を求め下衆生を化する大士を云ふ。威儀とは、規律にかなへる儀容の意にて、こゝにては菩薩の行といはんが如し。○大法施を行じ 法施とは、法を他人に説き聞かしめて、其善根を増長せしむる事を云ふ。○虚空に先ちて死せず虚空に後れて生ぜざる 虚空と其壽命を共にすとの意にて、即ち不生不滅といふに同じ。生ぜざるは生きずの意なり。○不退堅固の眞法身を打殺し 不退とは、佛道修行の過程に於いて後戻りせざる事を云ひ、堅固とは、其道心の何物にも感動せざるを云ふ。

ふ。法身とは、無色無形の理佛、即ち佛の法性本體なり。眞は眞實の意。打殺とは、打は打算打聽などの打にて、無意義の助字。殺は獲の意なれば、眞法身を打殺しとは、佛の法性を我が身に體得するを云ふなり。○金剛不壞の大仙身を成就せんには 金剛とは、黄金の中の精を云ふ。是れ極めて堅きものにて、破壊する事なければ、之を金剛不壞といふ。大仙身とは、佛身をいふなり。「般若燈論」に、菩薩聲聞等も亦仙と名づく。中に於て最尊なるが故に佛を大仙と名づくとありと云ふ。是れ仙家にては肉身の長生不老を計り、佛家にては不生不滅の涅槃を證せん事を計る。其跡相似たるを以て云ふなり。成就せんにはは、前の如かじに係れり。

此に於て、眞正參玄の上士兩三輩を得て、内觀と參禪と共に合せ並べ貯へて、且つ耕し且つ戰ふ者、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ二肩を増し得て、今既に二

百衆しやくしゆに近ちかし。其その中間ちゆうかん、方來ほうらいの衲子のつす、勞屈疲倦らうくつひけんの族むら、或あるひは心火逆上しんくわぎやくじやうし、正まさに發狂はつきやうせんとする底ていを憐あはれみ、密ひそかに此こゝの内觀ないくわんの至要しえうを傳授てんじゆし、立所たちどころに快癒くわいじゆせしめ、轉うたた悟さとれば轉うたた進すすましむ。

○真正參玄 真正とは、眞實に、如實になどいふに等し。○内觀と參禪と共に合せ並べ貯へて 前段に述べしが如く、内觀と參禪と並立せしむるが禪師の主意なるにて、内觀養生のみを目的とするは、禪師の取らざる所なり。○且つ耕し且つ戦ふ 田を耕作するが如く、敵と力戦するが如く、修行を勵むを云ふなり。○二肩 二人といふに同じ。○其中間方來の衲子 其中間とは、其間にの意にて、即ち此所に云ふ三十年の間になり。方來とは、四方より來るの意、衲子は、前述の如く、僧衣を着けたる者即ち所化の事なり。○勞屈疲倦の族 禪學に疲勞し退屈し倦怠せる輩がの義なり。

馬年ばねん今歲こんさい古稀こきに越こえたりと云いへども、半點はんてんの病患びやうくわんなく、齒牙しが全まったく搖落あやうらくせず、眼耳次第げんにしだいに分明ぶんめいにして、動やもすれば發慧あいたいを忘わする。毎月まいげつ兩度りやうどの法施終ほつせつひに怠倦たいけんせず。請しやうに佗た方ほうに應おうじて、三百五百さんびやくの海象かいざうを聚會しゆあして、或あるひは五旬じゆん七旬しちじゆんを、經きやうに錄ろくに、雲水うんすいの所望しよぼうに隨したがつて胡說亂道うせつらんたうする者もの、大凡おほよそ五六十會ごじゅうごに及およぶといへども、終つひに一日いちにちも罷講齋はいかうさいを鎖とぎさず。身心健康しんくわんかう、氣力きりよくは次第しだいに二三十歲にじゅうさんさいの時ときには遙はるかに勝まさされり。是れ皆彼みなかの内觀ないくわんの奇功きこうに依よる事ことを覺おぼゆ。

○馬年 前に馬齒とありし所に述べたる如く、我が歳を謙遜して云ふ語なり。○古稀 七十歳を云ふ。杜甫の詩句に、「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」とあるに出づ。○雙鬢 老眼鏡を云ふ。「洞天清錄」に「雙鬢、老人不辨細書、以此掩目則明」とあるが如し。○毎月 兩度の法施 法施は、前述の如く、法を人に説き聞かすむる事なるが、こゝにては、恒例の説教を云へるなるべし。○請に佗方に應じて 請は招待なり。即ち他方よりの招待に應じてとなり。○海象 行脚僧を尊びて譬へ云へるなり。「義楚六帖」に「香象爲象名、香象渡河則徹底截流」とあり、併し「太平記」十四に、「香象の浪を踏で大海を渡らん勢ひの如く」とあるが如く、香象といふ象が水を渡る時には、底の見ゆる如く流を截りて渡るものなれば、今海を渡る場合を見立て、海象と云ひ、以て雲水僧に譬へたるなり。○經に録に 經典を或は語録をの意なり。○胡說亂道 胡は、聲の喉間にあるを云へば、胡說とは不分明に説くの義、亂道は、亂りがはしく言ふの意なれば、胡說亂道とは、曖昧に物を云ふの義にて、胡亂(字の廣東音なりと云ふ)の文字は、此語より出でたりとも云ふ。茲にては自ら謙遜して云ひたるなり。○罷講齋を鎖さず 罷講とは、講釋をやむる事、齋は佛事の

時の食事なれば、講釋をなし得ずして、其爲めに聽講者が食事を受け得ざる如き事はなさずとなり。

住庵の諸子、各々悲泣作禮して云く、吾が師大慈大悲、願くは内觀の大略を書せよ。書して留めて、後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち領す。立處に草稿成る。稿中何の説く所ぞ。

○悲泣作禮 悲泣とは、忝けなさに泣くなり。感泣と云へると略同じ。悲泣作禮して請うて曰くとなり。○吾が師大慈大悲 大慈大悲とは、大慈悲といふに同じく、本來は、一切衆生を一子の如く慈む如來の廣大なる慈悲を云ふなり。悲とは苦を抜くを云ひ、慈とは樂を與ふるを云ふ。是を拔苦與樂とも云ふ。されど、茲にては、禪師に向つて云へるにて、吾が師大慈大悲の人よ、即ち大慈大悲の吾が師よとの意なり。○禪病疲倦 禪病の爲めに疲

倦せること吾が徒の如きとなり。○領す うなづくなり。承諾の意を示すなり。○草稿成る 茲に成ると云へる草稿は、即ち始めの方に、舊書櫃より取り出せりと云へるものに當るわけなり。而して、そはやがて本書の本文たる「夜船閑話」其者なれど、茲に念の爲めに、稿中何の説く所ぞと云ひて、豫め其大要を提げ置くなり。されば、其内容は、此まで述べ來りし所を約説するに過ぎざると共に、又本書の本文の詳説する所なれば、以下一々に詳釋せず、大概に止む。

曰く、大凡生を養ひ長壽を保つの要は、形を鍊るに如かず。形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らしむるにあり。神凝る則は氣聚る。氣聚る則は即ち眞丹成る。丹成る則は形固し。形固き則は神全し。神全

き則は壽し。是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴の諸子、此の心要を勤めて、はげみ進んで怠らずんば、禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず、禪門向上の事に到つて、年來疑團あらむ人々は、大きに手を拍して大笑する底の大歡喜有らん。何が故ぞ。月高くして城影盡く。

○形を鍊る 肉體を鍛へて強からしむるを云ふなり。扱「生を養ひ」と云ふより「神全し」と云ふ迄は、白玉蟾の「養生之要、先不若鍊形。鍊形之妙、在乎凝神。神凝則氣聚、氣聚則丹成、丹成則形固、形固則神全」といふ語に依つて書けるなり。此語は「闍提記聞」中の「閑話」には取られ居り、禪師の「遠羅天釜」の中にも引かれ、又附録の「夜船閑話と白幽仙人」の中に引ける「正庵法語」の文中にも「仙書に曰く」として引かれたり。○神氣 神とは五臟にある七神なり。氣は唯添へたる迄なり。○神凝る則は氣聚る 七神臍下に凝る時は、其處へ五臟六腑の氣も集注すとなり。○眞丹成る 眞の鍊丹成ると云ふにて、即ち内觀鍊氣成るといふも同じ。○丹は果して外物に非ざる事を 鍊丹とは他物にあらず、唯心火を降下して臍下に充足せしむる事のみと云ふなり。千萬とは、度の甚しきを強めいふ詞にて、茲にては、全く唯などいふ程の義なり。○禪門向上の事に到つて 禪學をなして精神を向上せしむる上の禪理に於いてとなり。○手を拍して大笑する底の 内觀の結果、頓悟する所ありて、年來の疑團も雲散霧消して、思はず拍手大笑する程のとなり。○何が故ぞ 如何なれば禪病勞疲を救治する事と、禪理の疑團を氷解する事との二事が、内觀鍊氣の一事

に由つて並び起り得るかならばとなり。其れは例へば以下の例の如しといふなり。○月高き時にて城影盡く 「三體詩」に、「月高城影盡、霜重柳條疎」とあるを取れるなり。即ち月の低き時には城影は長く引けども、月高く昇れば城影は盡きて無くなるなり。内觀の理亦斯の如しと云ふにて、即ち内觀の功進んで禪病を治する迄に至るは、月の愈昇りて高きに至るが如く、月の昇ると共におのづから城影の盡くるは、禪病を治するに至りし内觀の力の、おのづから禪理の疑團をも氷解するに至るに等しと云ふなり。

これとき はうれきていちうまうしやう
維時寶曆丁丑孟正廿五賞

きう びん しゆ きとう ちう けい だい
窮乏菴主飢凍炷香稽首題

○孟正 孟は始めにて、孟正は正月なり。○廿五賞 賞は、精しくは賞莢と稱し、幾の時を生じたりと言ひ傳ふる瑞草にして、月の朔日より十五日迄には日毎に一葉を増し、十六日より晦日迄には日毎に一葉を落せりと云ふ。斯の如く、葉數に由つて日數の知らるゝ草なれば、日の字の代りに莢の字を用ふるに至りしなり。○炷香稽首題 炷香とは、香をた

くにて、事物を尊敬する時になす作法なり。稽首とは、首の地に至るを云ふにて、即ち首を下げて禮をなす事なり。題とは、題辭を記す又は單に題すなども云ふに等しく、書物又は圖卷の初め、若くは畫幅、又は石碑の上などに、辭を記す事を云へば、茲にては、此序文を本書の卷首に題せりとの意なり。

聞せばや篠田の森の古寺の

小夜更け方の雪の響を

忘れては寒しとぞ思ふ床の雪を

拂ふ隙なき人もありしに

白 隆 禪 師

夜 船 閑 話

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を激起し、精鍊刻苦する者既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す。従前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して漚滅す。自ら謂へらく、道人を去る事寔に遠からず。古人二三十年、是れ何の捏怪ぞと。怡悅踏舞を忘るゝ者數月。

○山野 山僧野僧といふも同じく、自己を卑下して云ふ語なり。○參學 參禪といふも同じく、禪學を修するを云ふ。○勇猛の信心を憤發し 勇猛とは、勇猛精進の勇猛にて、序

釋に云へるが如く、難行に打勝つ勇氣あるを云ふなり。信心とは信仰にて、勇猛の信心とは、勇猛心といふも同じ。憤發とは、序文に憤起とありしに同じく、奮起といふに同じ。○不退の道情を激起し 不退とは、不退轉ともいひ、序釋に云へるが如く、佛道修行の過程に於いて後戻りせざる事、道情とは、信心と云ふに同じく、激起も憤發といふに同じ。畢竟此句は、前の句を云ひ換へたる迄に過ぎず。對句には、斯る類のもの少からず。以下准じて知るべし。○精練刻苦 禪學を修する事の熱心なるを云ふ。○落節 竹の節を落したる如しとの義にて、悟覺せりとの意なるべし。○從前多少の疑惑 此れ迄の若干の禪學上の疑惑がとなり。○根に和して氷融し 和は、應和などの和にて、枝葉より根もとに至るまでの如くに、其根柢まで氷の融くるが如くに釋然たるを得たりとなり。○曠劫生死の業根 曠は遠の義、劫とは、長時と譯し、「大智度論」に「大時名劫」ともありて、長大なる時の單位なり。されば曠劫とは、多くの劫を重ねたる遠く久しき間の事を云ふ。生死とは流轉輪廻の事、即ち生きかはり死にかはりする事、業根とは、業因といふに同じく、身口意に關する善惡の所作を業と云へば、善惡の果報(生死)を生むべき善惡の行爲を業根といふなり。○底に徹して瀉滅す 水面より水底まで見えすが如くに、其根柢迄、水面の瀉

の消ゆるが如くに解悟せりとなり。○道人を去る事寔に遠からず 「中庸」に、「道不遠人。人之爲道而遠人、不可爲道」とあるを取りて云へり。「孟子」に、「道在邇、而求諸遠」とあると同じく、道は人に遠きにあらず、而して之を求め得ざるは、自ら修學せざればなり。されば、修學さへすれば、道はおのづから吾に來るなりと云ふなり。○古人二三十年是れ何の捏怪ぞ 捏怪とは、餘り見かけざる執字なれど、捏造奇怪の約語なるべく、古人が、參學に或は二十年或は三十年を費したりと云ふは、何等の捏造事何等の奇怪事ぞや、(吾は僅かに兩三年にして落節解悟せるに)と告めたる意なるべし。○怡悅踏舞を忘るゝ者數月 自己が兩三年にして禪悟を得たるを怡び悦びて、手の舞ひ足の踏むを覚えざる事數月なりきとなり。

向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊總に脱洒ならず。自ら謂へらく、猛く精彩を

著け、重ねて一回捨命し去らむと越て牙關を咬定し、
 雙眼睛を睜開し、寢食ともに廢せんとす。既にして、
 未だ期月に亘らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、
 雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如
 し。肝膽常に怯弱にして、舉措恐怖多く、心身困倦し、
 寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に
 涙を帶ぶ。

○向役日用を廻顧するに 向後は、爾後といふも同じく、其後なり。日用は、こゝにては
 日常といはんが如し。日常の我が身心の状態を反省し見るにとの意なり。此一段は、前段

に云へるが如く、禪師自ら大に自得する所ありしが如く思ひて、勇躍歡喜し居りしに、扱
 いよく我が日常を反省すれば、實は未だ成就の位地に到り居らざりし事を發見して、大
 に悔悟せる趣を述べたるなり。○動靜の二境全く調和せず 物には、凡て動と靜との二面
 あり。而して禪學は、靜を以て先とす。是れ靜は動を生ずるものなればなり。今禪師は、
 未だ靜に歸する事を得ず、或時は靜或時は動といふ如き有様にて、動靜の二境が、未だ靜
 より動を生ずるが如き状態に調和を得て居らずといふなり。○去就の兩邊總に脱洒ならず
 去就とは、避就などいふも同じく、事物に附就して執着心あると、去避して淡泊なると
 を云ふなり。兩邊とは、兩側、兩方などいふに同じく、脱洒とは、脱灑、洒脱などいふに
 同じく、衣を脱ぐが如く水にて洒ぐが如く、さつぱりとして心にとめざるを云ふなり。今
 禪師は、去ともつかす就ともつかす、其兩方に對して總ていつれとも決心し切れざる状態
 にありと云ふなり。○精彩を著け 精彩は、鮮彩などいふが如く、優れたる色澤の義なる
 が、こゝにては、此れ迄の修行ぶりにては益なければ、其上に大に色彩を著け施してとい
 ふにて、即ち大に精修の度を高めてといふなり。○一回捨命し去らむ 捨命とは、修行の

爲めに命を捨つる事にて、捨身といふに同じ。今一度命を捨つるまでも修行を試みんと云ふなり。○牙關を咬定し 牙關は唇なり。咬はかむなれば、唇を閉ぢてといふなり。○雙眼睛を瞪開し 雙眼睛の雙の字は、寫傳の際に誤り入りたるなるべし。「蘭提紀聞」中の文にも、「鍊丹秘要」にも、眼睛とのみありて雙の字なし。削るを可とす。瞪はみはるなれば、瞳を見張りて視線を一所に定むるを云ふなり。○期月 一個月を云ふ。○心火逆上し 序釋に云へるが如く、心臟の氣の逆上する事なり。○肺金焦枯して 序文に「肺金いたみかじけ水分枯渴して」とありしに同じ。肺臓の痛み枯るゝ事にて 精しき解は、かしこを見て知るべし。○雙脚水雪の底に浸すが如く 心火逆上すれば、従つて脚部冷却するに至るなり。○兩耳溪聲の間を行くが如し 心火逆上せるが爲め、兩方の耳の耳鳴する事を譬へ云へるなり。○肝膽常に怯弱にして 肝膽とは、肝臓と膽腑とにて、共に腹部にあり。此二者、表裏と云ひて、一つ所にありて互に相依り相輔くるものなり。又肝は將軍の官、膽は中正の官と云ひて、體軀の剛強を成すものなり。其れが今疲弱りたるなり。○寐寤種々の境界を見る 寐は睡れる間、寤は醒めたる間なり。夢にも現にも種々の物象が目に見

ゆるなり。「夢は五臓の疲れ」など云ふ諺と比べ思ふべし。○兩腋常に汗を生じ 腋は心臟の支配なりとなす。汗も心臟の疲れより出づとなせり。○兩眼常に涙を帶ぶ 眼は肝臓の支配なりとす。従つて涙脆くなるは、肝臓の弱りよりなりとなすなり。即ち禪師は、大に悔悟せる結果、參學度に過ぎて、五臓六腑を疲勞せしめ、逆上の變症に罹れるなり。

此に於て、遍く明師に投じ、廣く名醫を探ると云へども、百藥寸功なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり。世人是を名けて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閲し、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好まず。行く則は必ず走りて避く。人其の賢愚を辯ずる事なし。里人専ら稱して仙人とす。聞く、故の丈山氏

の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す。
 人あり禮を盡して咨叩する則は、稀に微言を吐く。退
 きて是を考ふるに、大に人に利ありと。

○明師に投じ 達道せる禪門の名僧を尋ね行けりとあり。○城の白河の山裏 城は山城の國の略、白河は同國愛宕郡の山村にて、東山一帯の中にあり。皇城の東方に當りて、北の方比叡山に續けり。山裏は山中の義なり。○白幽先生 白幽とは「近世畸人傳」に云へるが如く、白河の幽人の義を以て稱せし名なるべし。此人の考證は、附録の「夜船閑話と白幽仙人」の中に記したれば、就いて見るべし。○靈壽三四甲子を閑し 靈壽とは、靈妙不可思議なる長壽の義、甲子とは、甲子歳より癸亥歳までの六十年を一甲子と名く。故に三四甲子とは、百八十歳乃至二百四十歳ばかりを云ふなり。○人居三四里程を隔つ 白河の山中にても、奥山深く栖む故、人里より三四里を隔つと云ふなり。○故の丈山氏 故人丈山氏

といふにて、石川丈山を云ふなり。丈山との關係も、附録の文中に述べたり。丈山は、洛東の隱士として有名の人なれば、精しく傳するの要なかるべきが、叡山の麓一乗寺村に詩仙堂を築きて之に居り、優游吟哦して自ら娛む。故郷參州に歸臥せんとして果さず、其より復た城市に入らざるの意あり。偶々後水尾院の召さるゝあり、辭するに誓つて鴨川を渡らざる事を以てす。寛文十二年九十歳にして歿す。嘗て妻妾を置かず、最も詩に長じ、日東の李杜、東方の詩杰などの目あり。又書畫を善くし、傍ら茶道に通ず。○咨叩 とひたいくにて、先方の意見を尋ぬるなり。○微言 微妙の言なり。幽玄微妙にして、意味深長なる言なり。

此に於て、寶永第七庚寅孟正中浣、竊かに行纏を着け、
 濃東を發し、黒谷を越え、直に白河の邑に到り、包を
 茶店におろして、幽が巖栖の處を尋ぬ。里人遙に一枝

の溪水を指す。即ち彼の水聲に随つて、遙に山溪に入る。正に行く事里ばかりに、乍ち流水を踏断す。椎徑もまたなし。時に一老夫あり。遙に雲煙の間を指す。黄白にして方寸餘なる者あり。山氣に随つて、或は顯はれ或は隠る。是れ幽が洞口に垂下ずる所の蘆簾なりと。

○寶永第七庚寅孟正中浣 寶氷は、東山天皇の御宇の年號にして、其第七年（今を距る事二百二年前）の庚寅の歲正月の中旬となり。此年は、禪師の二十六歳の時に當れり。孟正の解は、序釋の中に既に云へり。浣は沐浴の義にて、漢土の古制に、朝臣十日に一度暇を賜はつて沐浴し、一月三度賜暇浣沐の期ありき。之に依りて一日より十日迄を上浣、十一

日より廿日迄を中浣、廿一日より三十日迄を下浣と稱せり。浣は又澣をも用ふ。○行纏脚絆の事なり。○濃東 美濃の東部の義なり。「白隱年譜」(附録參看)の寶永七年の條には、春松蔭寺に還り、又國內の寶臺寺に至ると記し、茲に此頃心火逆上の事ありとして、之を治せんが爲めに、妙手を尋れんとて、美濃の靈松寺に至り、此處にて白幽の事を聞いて、該寺を出發して京都に向へりと記せり。禪師の自叙傳たる「壁生草」には、此條の事記さざれば、確め難し。禪師の白幽を訪はれしは、猶後年の事ならざるかの疑あり。されば「年譜」の靈松寺云々の記事は、強ひて「夜船閑話」に合せんが爲めのものには非るかと思はる。猶此邊の消息は、附録に論ずる所と對照して合點する所あるべし。○黒谷 東山の中にあリ。此より東北一里許にして白河に達すべし。扱茲に特に「黒谷を越え」の文句を出せるは、次の「白河の邑に到り」の白の字と、黒白相對せしめんが爲めにて、或は古聯句(一休か)の「白河連黒谷紫野接丹波」より來りしものなるべし。○流水を踏断す 溪流其處に盡きたるなり。即ち彼の溪流に沿うて其岸を辿り來れるに、此處に至つて溪流の断ゆると共に、山徑もなきに至れるなり。○方寸餘 一寸四方餘りなり。○山氣に随つて 上に雲煙とあ

ると同じく、山の霧なり。嵐氣などいふも同じ。即ち霧の浮動に従つて隠見すとなり。
 予即ち裳を褰げて上る。巉巖を踏み、蒙茸を披けば、
 氷雪草鞋を咬み、雲露衲衣を壓す。辛汗を滴し、若膏
 を流して、漸く彼の蘆簾の處に到れば、風致清絶、實
 に物表に丁々たる事を覺ゆ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗
 す。且らく巖根に倚りて數息する者數百、少焉ありて、
 衣を振ひ襟を正して、畏づく鞠躬して、簾子の中を
 望めば、朦朧として、幽が目を收めて端坐するを見る。
 蒼髮垂れて膝に到り、朱顏麗くして棗の如し。大布の

袍を掛け、軟草の席に坐せり。窟中纔に方五六笏にし
 て、全く資生の具無し。机上只中庸と老子と金剛般若
 とを置く。

○裳 裾なり。○巉巖 峻しき高きいはほなり。○蒙茸 かづらの生え茂りなり。扱此處
 の三句は「後赤壁賦」の「予乃攝衣而上履巉岩披蒙茸」とあるを取り用ひたるなり。○
 雲露衲衣を壓す 雲や露が僧衣を壓し潤せりとなり。○辛汗を滴し苦膏を流して 辛苦の
 二字を分ちて、汗膏の二者に熱せしめたるなり。膏は、身より出づるあぶらなるが、是は
 恐らく、俗にあせあぶらを流すと云ふ事を漢譯したるものなるべし。○物表に丁々たる事
 を覺ゆ 物表とは、物外といふに同じく、又塵表、塵外などいふも同じ事にて、塵世萬物の外
 にと云ふ意なり。丁々は、もと伐木の聲、或は碁子の聲の形容なるが、こゝにては迢々に
 通じ用ひたるなるべく、即ち物外に超然たるを覺ゆの義にて、人寰以外に來りし心地すの意

なるべし。○數息 息を數ふるなり。○鞠躬 身を屈むる貌なり。○簾子 子は、日子、朝子、金釵子などの子と同じく、名詞に添加して用ふる助字なり。○蒼髮 俗に云ふ緑の髪にて、翡翠の髪などいふも同じ。黒髪之美稱なり。○朱顏 紅顔といふに等しく、櫻色の顔ばせなり。○大布の袍 太布の上著の義なり。○輦草の席 軟かき草を以て作れるむしるなり。○方五六笏 笏は、尺の借字なり。即ち五六尺四方の意なり。○資生「易」に「至哉坤元、萬物資生」とあるより出で、とりて生くの義にて、即ち衣食の事なり。○中庸と老子と金剛般若「中庸」は、魯の子思(孔子の孫)の著はす所にして、孔子の意を祖述せるものなり。卷初に「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」と云へる、是れ其大綱なり。即ち天人一貫の眞理を説き、中庸の徳を明せるものなり。○「老子」は、周の老子の著なるを以て此名あり。其大道上徳を説けるを以て「道德經」とも名く。老子の所謂道とは、曰く沖、曰く自然、曰く樸、曰く無爲にして、人々無爲純樸にして大道に歸せば、何の亂離か之あらんと云ふ、是れ即ち其本旨なり。故に、老子自ら隱避して世難を避け、後世よりは太上老君として仙祖とせられたり。「金剛般若」は、具さには「金剛般若波羅密經」、略し

ては「金剛經」といふ經典にして、鳩摩羅什の譯なり。外に猶四譯あり。本性空を以て一切法を觀すれば、心・行する處なし。是れ微妙殊勝の定にして、無礙の作用あり等、空無性の理を説きて、無所得の妙理を教へたり。禪家には専ら此經を誦す。扱此段より以下、禪師の辭し去らるゝ所まで、「闍提記聞」中の文及び本書(主として本書なるべし)に依つて書ける「近世崎人傳」所載の白幽子の傳を比看せば、解釋に便多かるべし。

予則ち禮を盡して、苦ろに病因を告げ、且つ救ひを請ふ。少焉幽眼を開いて熟々視て、徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、榿栗を拾ひて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此外更に何をか知らんや。自ら愧づ、遠く上人の來望を勞する事を。予即ち轉た咨叩して休

まず。

○半死の陳人 陳人とは、「莊子」に、「人無人道是之謂陳人」とあるに出で、無用の人の義にて、自ら卑下して云ふに用ふ。半死の陳人とは、半ば死せるに等しき役に立たざる人なりと云ふなり。○積栗 榎は、こぼけとて、其實酸くして形梨の如きを附くる一種の木なり。栗は、即ちくりなり。○麋鹿 麋は、なれしかと云ひ、鹿の一屬にて、水牛に似たるものなり。山麋、野麋などあり。こゝは山麋なり。鹿は、普通の鹿なるが、漢土にては、古へ仙獸としたり。○上人の來望 上人とは、「圓覺要覽」に、「內有智德、外有勝行、在人之上、曰上人」とありて、佛家にて、道德堅固にして才智圓滿なる僧の敬稱となす語なり。來望とは、來訪して所望する事なり。○吞呬 前に釋せり。禪師が無望せらるゝの一句を添へたり

時に幽恬如として予が手を捉へて、精しく五内を窺ひ、

九候を察す。爪甲長き事半寸、慘乎として頰を攢めてつげて云く、已哉。觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す。實に醫治し難き者は、公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を恃みて、而して後に是を救はんと欲せば、扁倉力を盡し、華陀頰を攢むるも、奇功を見る事能はじ。公今既に觀理の爲めに破らる。勤めて内觀の功を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。

○恬如 靜かなる貌なり。○五内 五臟の事のみをも云へど、又五臟六腑を廣くおしなべても云へば、こゝは廣義の方なり。猶序釋を見合すべし。○九候 九箇所の脉處なり。一身の脉處を、三部九候とて上中下三部と分ち、其三部の中に又各三處を定め、都て三部九候の脉といふ。「内經」の三部九候論に詳なり。○慘乎 いたむ貌なり。「詩經」に、「憂心慘々」とあるが如し。○頰を攢めて 困りたる事に對してなす形相なり。○已哉 施すべき術なき時に、歎息していふ語なり。○觀理度に過ぎ 觀理とは、禪理を觀する事にて、觀するとは、心に思ひ浮べて明かに悟る事を云ふ。觀法といふも同じ。此句と次の句との二句は、序文に、「參窮度に過ぎ、清苦節を失する」とありし二句と同じ句法なり。解釋も彼處を見合せて知るべし。進修の解も、序釋中にあり。○扁倉 扁鵲と倉公との二名醫にて、傳は 序釋中にあり。○華陀頰を攢むるも 華陀も名醫にて、此人の傳も序釋中にあり。こゝの頰を攢むるもは、前に出でたるとは稍其意を異にし、物を考ふる時の形相を云へるなり。○内觀 自己の本性を觀察するの義にて、やがて禪的の醫學的長壽法なる事、序釋中に説ける所の如し。精しくは、序釋及び本書の説く所を見て知るべし。○起つ

事能はじ 起つは回起の起にて、回復する事なり。回復むつかしかるべしとなり。○起倒は必ず地に依る「入大乘論」に、「因謗大乘、而墮惡道、亦由大乘、起諸善業。如人因地倒、還依地而起」とあるより、「地に倒るゝ者は地に依つて立つ」といふ諺出でたり。「撰集抄」などにも見えたり。こゝには、其を約めて云へるなり。

予が曰く、願くは内觀の要秘を聞かん。學びがてらに是を修せん。幽肅々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼公の如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔し聞ける所を以て、微しく公に告げんか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀なり。怠らずんば必ず奇功を見む。久視も亦期しつべし。

○學びがてらに、こゝのがてらば、其の序での意に非ずして、其と共にの意なり。されば、學びがてらに是を修せんとは、學び且つ修せんといふに等し。○肅々如 おごそかなる貌なり。嚴肅、厲肅などの肅の意なり。○從容 おちつきて過らざる貌なり。○久視も亦期しつべし 久視は、久しく視るにて、長生の義なる事、既に序釋中に云へり。期は、期待と熟して、待つ意なり。期しつべしとは、豫期の如く得べしとなり。

夫れ大道分れて兩儀あり。陰陽交和して人物生る。先
天の元氣中間に默運して、五臟列り經脉行はる。衛氣
營血互に昇降循環する者、晝夜に大凡五十度。肺金は
牝臟にして膈上に浮び、肝木は牡臟にして膈下に沈む。
心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部

を占む。

○大道分れて兩儀あり 大道とは、儒家に太極といふを、老子を祖とする道家にて云ふ語なり。「老子」に、「大道廢、有仁義」といふものは是なり。太極或は大道といふは、天地の未だ分れざる以前、或は天地に先ちて存する無形の條理にして、萬物の本源たる者といふ。兩儀とは、天地をも云へど、こゝは陰陽の事なり。扱こゝは「易」の繫辭に、「易有太極、是生兩儀」とあるに基く。「太極圖說」の説く所に依れば、太極に動靜二種の活力あり。之に依つて陰陽の二氣を生ずとなり。○陰陽交和して人物生る 陰陽の二氣相交りて人間なるもの生ずとなり。是れ亦「易」に、「天地絪縕、萬物化醇、男女構精、萬物化生」とあるに基く。「内經」にも、「人以天地之氣生、四海之法成」とあり。○先天の元氣 先天とは、「易」に「先天而天弗違」とあるに出で、人の生れ来る以前を云ふ。元氣とは、「漢書」に「太極中央元氣」とあるが如く、萬物の根本をなす大氣にて、「易」に「精氣爲物」とある精氣に同じ。併しこゝは、専ら人體に就いて云へるにて、先天の

元氣とは、序釋中に云へる父母より受けたる五臟の氣を云ふなり。○中間に默運して中間とは、人間の體内を云ふなり。默運とは、黙りてめぐるといふにて、音も何もなければ循環するを云ふなり。○五臟列り經脉行はる五臟とは、既に云へるが如く、肺心肝脾腎の五つを云ふ。列りとは、五臟各其位地を得て相並べるを云ふなり。經脉とは、十二經奇經八脉の事にて、血のめぐり行く筋なり。行はるとは、身體中に各其所を得て渡り居るを云ふなり。○衛氣營血互に昇降循環する者衛氣營血とは、氣と血との事なる事、序釋中に詳述したり。此氣血が、經脉を運行して暫くも止まらず、上より下、下より上と往來するが故に、是を昇降と云ひ、昇降して止まざるが故に、循環と云ふ。「内經」に、「終而復始、如環無端」とあり。○晝夜に大凡五十度氣血の經脉を運行する事、晝間は外部を二十五度、夜間は内部を二十五度運行すと云ふ。即ち晝夜合せて五十度となるなり。○肺金は牝臟にして膈上に浮び肺金とは肺臟なり。五臟を五行に當つる事は、既に序釋中に述べたり。以下の肝木、心火、腎水の解、共に序釋を見るべし。乾臟とは、牝は陰なれば、陰の臟なりと云ふなり。肺は、金に當り秋に當り陰に當ればなり、膈上とは、膈は隔膜を云

へば、隔膜の上の事にて、即ち胸を云ふなり。即ち肺は胸に在りと云ふなり。○肝木は牡臟にして膈下に沈む肝は、木に當り春に當り陽に當れば、牡臟と云ふなり。牡は陽なる事勿論なり。膈下は腹を云ふにて、即ち肺は腹に在りと云ふなり。○心火は大陽にして上部に位し心臟は、火に當り夏に當り陽に當れば、大陽と云ひ、此も胸にあれば、上部に位しと云ふなり。○腎水は大陰にして下部を占む腎臟は、水に當り冬に當り陰に當れば、大陰と云ひ、此も腹にあれば、下部を占むと云ふなり。

五臟に七神あり。脾腎各々二神を藏す。呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る。一呼に脉の行く事三寸、一吸に脉の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脉一身を巡行する事五十次。

○五臟に七神あり 肝には魂、肺には魄、心には神、脾には意と智、腎には精と志との神

ありと云ふ。神とは、一種の靈力なり。此七神、一身の活力の根源となるなり。○呼は心肺より出で 呼とは、つく息なり。つく息は、上部にある心肺の臟より出づとなり。○吸は腎肝に入る 吸とは、ひく息なり。ひく息は、下部にある腎肝の臟へ入るとなり。○一呼に脈の行く事三寸 脈とは、脈搏の事にて、一呼に三寸づゝ進むとなり。即ち氣血のめぐる事を云ふなり。扱此句より以下四句ばかりは、「内經」に、「人一呼脈行三寸。一吸脈行三寸。呼吸定息脈行六寸。人一日一夜凡一萬三千五百息。脈行五十度周於身。漏水下百刻、營衛行陽二十五度、行陰亦二十五度、爲一周也」とあるを約め取れるなり。別に釋するの要なかるべし。

火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして、つねに下流を務む。若し人察せず、觀照或は節を失し、志念或は度に過ぐる時は、心火熾衡して、肺金焦薄す。

金母苦しむ則は、水子衰滅す。母子互に疲傷して、五位困倦し、六屬凌奪す。四大増損して、各々百一の病を生ず。百薬功を立つる事能はず、衆醫總に手を束ねて、終に告ぐる處なきに到る。

○火は輕浮にして騰昇を好み 此句は、次の句と共に、火水の本性を述べたるものなり。是れ實は心火腎水の本質を明さんが爲めのみ。○觀照 前にありし觀理といふに同じ。○志念 觀念、觀想などいふと同じ意に用ひたるにて、畢竟前句と同一の意を言ひ換へて、對句とせしに過ぎず。○心火熾衡して肺金焦薄す 熾衡とは、もえあがり、衝の義、焦薄とは、いげ損ずの義、即ち心火逆上して肺金を衝く故、肺金之が爲めにとるかされ損ずとなり、即ち心肺共に勞疲するをいふなり。○金母苦しむ則は水子衰滅す 金母とは 肺金の事なるが、是れ影響を及ぼす方なれば、母といふなり。水子とは、腎水の事にて、是れ影響を

蒙る方なれば、子といふなり。扱肺金が心火に衝かれて苦しむ（焦薄する）時は、又腎水が、其影響を受けて衰へ減るとなり。即ち胸部亂るれば、其影響として腹部も亂るゝなり。然るに、内觀鍊氣の法は、氣を氣海丹田に收むるにて、所謂頭寒足熱ならしむるにて、即ち心火を腎水に交らせ、水火既濟せしめ、陰陽合體せしむるの理に據るなり。今其れが全く反對の状況を呈するに至ると云ふなり。○母子互に疲傷して 母は上述の如く肺金、子は腎水なり。其が上述の如く互に疲傷すれば、其結果として次の如くなると云ふなり、○五位困倦し六屬凌奪す 五位とは 五臓の事、困倦とは衰亂するなり。六屬とは六腑の事、即ち序釋中にも云へるが如く、大腸、小腸、膽、胃、三焦、膀胱是なり。凌奪とは、をのいきみだるの義なり。○四大増損して 四大とは、具さには四大種といひ、地水火風の四者をいふ。佛教にて一切物質の元素と定め、如何なる物體も、必ず此四種より造らるとなり。大とは、周徧普及して廣大無邊なるが故に、種とは一切の物質の因種なるが故に云ふ。こゝは人體を構成せる四大をいふなり。増損とは、増減といふに同じく、過不足を生ずるなり。○各々百一の病を生ず 各々とは、四大の各々にて、地大に就いて百一の黄

病、水大に就いて百一の痰病、火大に就いて百一の熱病、風大に就いて百一の風病、合せて四百四病を生ずといふなり。

蓋し生を養ふ事は、國を守るが如し。明君聖主は常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にする則は、九卿權に誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事なし。野に菜色多く、國餓莩多し。賢良潜み鼠れ、臣民嗔り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脉永く斷絶するに到る。心を下に專にする則は、九卿儉を守り、百

僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝ事なし。農に餘んの粟あり、婦に餘んの布ありて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え國強く、令に違するの烝民なく、境を侵すの敵國なし。國刀斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。

○九疇 漢土に於いて、三公に次げる官を稱する名なり。されど、こゝは三公九疇二十七大夫八十一元士等を廣く含めて云へるなり。○百僚 百官といふに同じ。○野に菜色多く菜色とは、飢ゑて青ざめたる顔色したるを云ふ。「禮記」に、「民無菜色」とあるは、飢ゑたる者なしの意なるが、「漢書」元帝紀には、「民有菜色」とあり。こゝも村里には飢ゑたる人多くの意なり。○國饑季多し 國は都城をいふなり。饑季とは、季は野に通じ

餓死せる者を云ふ。「孟子」に、「野有餓殍」とあるに出づ。而して此野の字を前の句に廻らしたるなり。○乘夷 多くのえびすなり。○民庶を塗炭にし 塗炭とは、「尙書」に、「有夏昏德、民墜塗炭」とあるに出で、塗は途、炭は炭火にて、炭火を渡る苦の義なり。庶は諸の義なれば、即ち萬民を非常の苦に落し入るとなり。○國脉 「潛夫論」に、「是以身常安、而國脉水」とあるに出で、國家の繼續する事を、人體の經脉に譬へ言ふなり。こゝに用ひたるは、最も適切なり。○民肥え 民の富む事を云ふ。○烝民 「尙書」に、「烝民乃粒」とあるに出で、烝は衆の義なり。○刀斗銅にて造りたる鎧の一種にして、大きき斗を容るべく、軍中にて晝は飲食を炊ぎ、夜は撃ちて警むるもの、即ち銅鑼の一種なり。「漢書」に、「不擊刀斗自衛」などあり。○戈戟 戈は、枝ある刃に長き柄をすげたるは、こゝにて、刺し搦き又は鉤け引くに用ふるもの、戟は、刃に上に向へる兩枝あるは、こゝなり。人身もまた然り。至人は常に心氣をして下に充たしむ。

心氣下に充つる時は、七凶内に動く事無く、四邪また外より窺ふ事能はず。營衛充ち、心神健かなり。口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上に恣にす。上に恣にする時は、左寸の火右寸の金を尅して、五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む。

○至人序釋中に云へるが如く、達道の人を云ふ。○心氣をして下に充たしむ 心臓の氣をして腹部なる腎臟の方へ落ち附かするなり。即ち心氣を氣海丹田に満たしむるなり。○七凶七情の狂ひより生ずる病を云ふ。七情といふには、太凡三種の別あれど、こゝに云ふは、

喜怒憂思悲驚恐なり。○四邪 風寒暑濕の四氣の齎らす邪氣なり。○營衛 上述の如く、氣血なり。○藥餌 餌は、くひもの、義にて、藥餌にてくすりの事なり。○庸流 凡庸の人の義なり。○左寸の火右寸の金を尅して 左寸の火、右寸の金とは、心火肺金二臟の事にて、左寸右寸と云ふは 診脈の部位に由つて云ふなり。尅とはけづるの義にて、即ち心火が肺金を衝き弱らすをいふなり。此一句、前段に「心火熾衝して肺金焦薄す」とありしに同義なり。○五官 眼(視官)、耳(聽官)、口(味官)、鼻(嗅官)、皮膚(觸官)の稱なり。○六親 普通の義にては、父母妻子兄弟の稱にして、其外猶比丘の六親、父の六親、母の六親等あれど、いづれも此處には適はず。「講義」には、六根の事なるべしと云へるが此説に従へば、眼耳鼻舌身意の六根を譬へ云へるなり。さすれば、前句に「五官縮り疲れ」と云へると、始と同意義の事を繰返し云へるにて、唯此句の方は、五官よりは一つ多く意といふものを云ひ添へたる事となるなり。苦しみ恨むと云へるも、縮り疲るといふに等しく、六親と云へる人倫上の語に對して、其れに相應せる人倫上の語を用ひたるに過ぎず。

是の故に、漆園曰く、真人の息は、是を息するに踵を以てし、衆人の息は、是を息するに喉を以てす。許俊が云く、蓋し氣下焦に在る則は、其の息遠く、氣上焦に在る則は、其の息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の氣有り。丹田の中に降下する則は、一陽また復す。若し人始陽初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是が信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要せよ。

○漆園 莊子をいふなり。莊子は、初め蒙といふ所の漆園の吏となりしを以て、此號あり。梁の惠王、齊の宣王の世に當り、孟子と時を同じうして生れ、其説老子と大同小異にして、世の仁義禮樂に拘せず、老子の無爲の如くにして、本然の性に随つて、心を大道に遊ばしむる人を真人と云ひ、之を表はして「莊子」の寓言にある事、略人の知る所なれば、精しくは云はず。○真人の息は是を息するに踵を以てし 此は、「莊子」の大宗師篇に「真人之息以踵、衆人之息以喉」とあるを云ふなり。是を息するに踵を以てしとは、實際に踵を以て息をなすにあらず。心氣下部に集まれば、息も下部より出づるが如く感ずれば、姑く最下部を擧げて踵と云へるなり。序中に足心の語ありしに對して知るべし。○許俊 朝鮮の人にて、「東醫寶鑑」の著者なりと云ふ。但し此處に引ける語は、實は「金匱要略」といふ古き書にある語を許俊の引けるものありと「講義」にあり。○氣下焦に在る則は其息遠く 六腑の一に三焦のある事、序釋中に述べし所の如し。三焦は、古名をかゝつたと云ひ、水分の排泄を司る水道にて、上焦は心臓の下、胃腑の上口にあり、中焦は胃腑の中にあり、下焦は膀胱の上口にありとなす。されば、こゝは、氣が臍下丹田の邊にある時は、

其處より出づる息も従つて長しとの意なり。○氣上焦に在る則は其息促る。上焦とは、上述の如くなれば、こゝは、氣が胸部にある時は、其息も従つて短しとの意なり。○上陽子傳詳ならず。○眞一の氣あり。眞正純一の氣の義にて、下段に「本原の眞氣」とあるも同じく、天然自然の元氣を云ふなり。○丹田の中に降下する則は一陽また復す。丹田は、序釋中に述べし如く、臍下の所を云ふ。上に下焦と云へる所も畢竟同じ所にて、丹田の中に降下する則とは、腎水に下り定まる時はと云ふなり。然るに、上段に、「心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む」とあり、又其處の釋義にも述べしが如く、心火は夏に當り、腎水は冬に當れり。然るに、夏は五月を中とし、冬は十一月を中とす。而して「易」の理に於ては、五月の夏至には一陰生じ、十一月の冬至には一陽生ず。されば、大陽なる心火の中にも一陰生じ、大陰なる腎水の中にも一陽生ずるなり。然るに、大陰なる腎水をして一陽を生ぜしむるは、大陽なる心火の氣が降下したる時なれば、丹田の中に降下する則は一陽また復すと云ふなり。猶以下の本文及び其が釋義を見れば愈明かなるべし。○始陽初復の候を知らむと欲せば、始陽初復とは、始めての陽初めて復すといふに


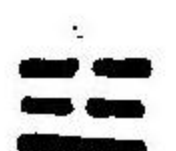
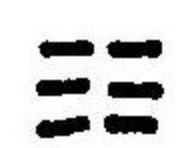
て、一陽來復といふに同じ。一陽來復とは、「易」の語にて、其卦は、五陰上に居り一陽下を占むる形、即ち $\text{☵}\text{☷}$ の如きなり。即ち陰極つて陽生ずるをいふにて、十月は極陰の月なるが、十一月冬至に至つて、一陽始めて生ず。而して、陽往きて復た反るが故に、來復すといふなり。故に十一月の卦を復といふなり。然るに、こゝに云へる始陽初復とは、丹田腎水に於ける陽氣の發生をいへるにて、候とは、徴候の義にて、即ちきざしなり。○暖氣を以て是が信とすべし。丹田腎水の邊に暖氣を生ぜば、其を以て愈陽氣の發生したる事を知るの符信となすべしとなり。信はしるしの義なり。○上部は常に清涼ならん事を要し。清涼とは、すがくしく冷たしといふにて、即ち次の句と共に、所謂頭寒足熱ならん事を求めよと云ふなり。

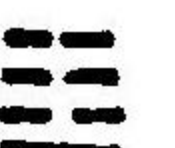
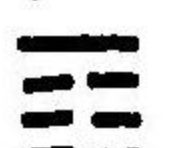
夫れ經脉の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一歳を全ふする

が如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是を地雷復と云ふ。冬至の候なり。真人の息は是を息するに踵を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す。是を地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人は是を得る則は、營衛充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる。是を山地剝といふ。九月の候なり。天是を得る則は、林苑色を失し、百卉

荒落す。是れ衆人の息は、是を息するに喉を以てするの象、人は是を得る則は、形容枯槁し、齒牙搖落す。所以に延壽書に云く、六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人、死し易し。須らく知るべし、元氣をして常に下に充たしむ。是れ生を養ふ樞要なる事を。

○經脈の十二 前段の釋中に云へる十二經の事なり。即ち心經、肺經、肝經、脾經、腎經、膽經、胃經、大腸經、小腸經、膀胱經、心包經、三焦經是なり。扱この一段は、「易」の卦象を以て、人體の陰陽水火の理を述べたるなり。○支の十二 十二支の事なり。即ち子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥是なり。○月の十二 正月より十二月までなり。○時の十二 此は従前の時を云ふなれば、晝夜の十二時を云ふなり。○六爻變化再周して一歳を全ふす

るが如し 六爻とは、易の卦をなす六つの畫線をいふ。乾坤の二卦を始めとして、六十四卦皆六爻を以て成れり。此六爻の中に、陰の爻あり陽の爻あり。其陰陽の爻種々に變化し、正卦變卦にて十二爻となりて循環す。是を一年十二月に配合するが故に、變化再周して一歳を全ふすと云へるなり。而して前の經脉の十二を之に比するが故に、全ふするが如しと云ふなり。○地雷復 易の卦の名なり。次の地天泰、山地剝も然り。即ち地雷復の卦は、本文に云ふが如く、五陰爻上に居り、一陽爻下にあるなり。即ち前段の釋中に表はせる如く、の如き卦にて、是を震下坤上の卦といふ。震下坤上とは、震  が下にあつて、坤  が其上に重れりといふ義なり。此震下坤上の卦は、前述の如く、一陽來復の象にて、十一月冬至に當れば、茲に冬至の候(きざし)ありと云へるなり。従つて、此卦を復或は地雷復と云ふなり。地雷復とは、震下坤上の坤は地の象にて、震下の震は雷の象なればなり。○眞人の息は是を息するに踵を以てするの謂か 其條下に述べし如く、息するに踵を以てすとは、最下部より息の出づるが如く感ずるにて、其は心火が腎水に下り交れる時なれば、即ち一陽最下部に生じたる時なり。故に恰も一陽に在る地雷復の卦に

當るなり。○地天泰 本文に云ふが如く、三陽爻下にあり、三陰爻上にありて、の如く、上下陰陽平分する卦。是を乾下坤上の卦といふ。坤は地、乾は天の象なれば、(大象に「天地交泰」とあり)地天泰といふなり。是れ十一月に於いて、最下に一陽生じ、十二月に至りて二陽となり、正月に至りて三陽となるなれば、孟正の候なりといふなり(孟正の解既出)。○萬物發生の氣を含んで百卉春化の澤を受く 上述の如く、陰陽正に平分して、是より進んで漸次陽を増さんとする勢なれば、斯く云ふなり。春化とは、春陽によつて化成すなどの義、澤とは、恩澤 惠澤の澤なれば、百種の花木が、開花すべき惠澤を蒙れる時なりと云ふなり。○至人元氣をして下に充たしむるの象 此も前の句に心氣とありしを、元氣と換へて出せるまでなり。○山地剝 本文に云ふが如く、五陰爻下に居り、一陽爻上にある の如き卦にて、是を坤下艮上の卦といふ。坤は地の象にて、艮は山の象。前より陽減じ來つて、最上の一陽剝られんとする象なれば、山地剝といふなり。是れ九月の候なるなり。十月に至れば、陽全く盡きて全陰となるなり。○延壽書「講義」に、「三元延壽書」の事なるべしとあれど、詳ならざるが如し。竹田昭慶の「延壽類要」(康正二年

作、曲直瀬玄朔の「延壽撮要」(慶長四年作)などにもなきか。姑く疑を存す。○六陽共に盡く則ち是れ全陰の人死し易し。是れ「延壽書」の文句なるが、六陽皆盡くるは、前述の如く十月の候にして、人に於いては全陰の人にて、心火全く亡びたる人なれば、死し易しといふなり。醫道に扶陽抑陰といふは、即ち之を豫防するなりといふ。

昔し吳契初、石臺先生に見ゆ。齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の云く、我に元玄真丹の神秘あり。上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。古へ廣成子是を以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是を受く。

○吳契初石臺先生 共に漢土古代の仙人なるべし。今其傳を得ず。又吳契初石臺先生と訓める一書もあれど、何れが是なるを知らず。○鍊丹の術 長生不死の仙藥たる金丹を

鍊り作るの方術なり。○元玄真丹の神秘あり 元はもと、玄はおくふかしのて、元玄とは、根元的のと云はんが如き意。真丹とは、真正の金丹の義なり。眞秘とは、神妙不可思議の秘術の義にて、即ち我は根元的眞正の金丹を鍊る秘術を知るとの意なり。○上々の器 九品の最上品たる上の上なる器量の人をいふなり。扱得て傳ふべからずといふ迄は、石臺先生の吳契初に云へる言なり。○廣成子 黃帝時代の仙人なり。「莊子」に、黃帝が廣成子の陸峒山に住むを聞いて、行いて長生の術を問へる事を記せり。廣成子の答へたる言に、「至道之精、窈々冥々、至道之極、昏昏黙々。無視無聽、抱神以靜、形將自正。必靜必清、無勞爾形、無搖爾精、乃可長生。慎内閉外、多知爲敗。我守其一、以處其和、故千二百歲 而形未嘗衰」とあり。猶次の黃帝の條參照。是を以て黃帝に傳ふとあるは、此事實を指せるなり。○黃帝 漢土太古の三皇の一人にして(五帝の一人とする説もあり)、帝位に登つてより、一日廣成子を陸峒山に訪うて、道を問ふ。廣成子黃帝の徳足らざるの故を以て、叱責して道を傳へず。帝退いて身を責むる事三月、再び廣成子を訪ふ。廣成子是に於いて長生の法を説く事、上記の如し。帝大に喜び、専ら心を養ひ神を鍊るに勤め、形

骸此世に留つて、魂は華胥氏の國に遊ぶを得るに至る。後帝の天下は、能く治つて、恰も華胥氏の國に異ならず。遂に妻妾及び群臣七十餘人と共に、黃龍に乗じて上天したる。○三七齋戒して、三七は、三七日即ち二十一日間の事なり。三週の間齋戒潔齋して、廣成子の教を受けたりとなり。されど、上述の如く、普通の傳にては、三週にあらずして三月なり。三七と書けるは、禪師の失考か、或は齋戒の語と共に、佛家の語らしくせんが爲めの變改か。猶尋ねべし。白幽子は、以上吳契初及び黃帝の事實を擧げて、今禪師も謹んで彼れの言を聽くべしと誨へたるなり。

夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり。爾の六欲を去り、五官各々其の職を忘るゝ則は、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て事ふる

所の天に合する者なり。孟軻氏の謂ゆる浩然の氣、是をひきゐて臍輪氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ねて是を守つて守一にし去り、是を養ふて無適にし去つて、一朝乍ち丹竈を掀翻する則は、内外中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。

○大道の外に眞丹なく、大道とは、既に述べしが如く、天地に先ちて存する無形の條理にして、萬物の本源たる者なり。こゝに眞丹と云へるは、練氣の意の眞丹にして、金丹の意の眞丹にあらず。即ち大道（即ち大極）を悟る外に練氣長生の法なしとなり。○眞丹の外に大道なし、又練氣長生の法が、獨り大道の理に合するなれば、眞丹練氣の外に大道はなしと云ふなり。○五無漏の法あり、無漏とは、煩惱の垢染を離れて清淨なるを云ふ。漏と

は、漏泄の義にて、貪欲瞋恚愚痴等の煩惱を、日夜に眼耳鼻舌身意の六根門より漏泄流注して絶えざれば、煩惱を漏と名くるなり。されば、煩惱を有して垢れたるが有漏にて、煩惱の垢れを離れたるが無漏なり。五無漏の法とは、「遠羅天釜」に、「蓋し五無漏の法あり。眼妄りに見ず、耳妄りに聞かず、舌妄りに言はず、身妄りに觸れず、意妄りに思慮せざる時は、混然たる本元の一氣、湛然として目前に充つ」とあるにて明かなるべし。即ち色聲香味觸の五塵を離るゝと殆ど同じ事を云ふなり。こゝは佛道には五無漏の法ありとの義なるべし。○六欲を去り 六欲とは、色欲、形貌欲、威儀姿態欲、言語音聲欲、細滑欲、人相欲の六つを云ふ。此六欲を去りて清淨になりてとなり。○五官各々其職を忘るゝ則は五官とは、眼耳鼻皮膚を云ふなり。其職を忘るとは、五官は、本來色聲香味觸の五塵に溺るゝが常にて、其が殆ど本職とも見做さるゝ程なれば、五塵に溺れざるを、其職を忘るとは云ひしなり。○混然たる本源の眞氣 混然とは、分別なき貌にいふ語なり。こゝにては渾沌たる云ふ意に當れり。眞氣とは、天然自然の元氣をいふなり。即ち混然たる本源の眞氣とは、生れたる時に享け得たる先天の元氣を云ふなり。元氣の未だ分れざる事を、

元混或は太混など云ふを思ひ合すべし。○彷彿として目前に充つ 五塵六欲を去る時は、我が先天の元氣、言ひ換ふれば我が本來の面目が、髮髯として心眼に浮ぶなりとの義を、形外に移して目前に充つと云へるなり。○大自道人 建仁寺の太白即ち暮山道人の事なるべし。初め太清滑の門に投じ、遂に大事を了畢して、屢諸寺に歴住し、應永十八年建仁寺に昇住し、同廿二年南禪寺塔頭大周軒に寂す。○我が天を以て事ふる所の天に合する 我が天とは、我が先天の元氣なり。事ふる所の天とは、我が先天の元氣を其れより享け得たる天地間の元氣なり。即ち我が先天の元氣を其本源たる天地の元氣に合體せしむとの意なり。○孟軻氏 孟子の事なり。人の能知る所なれば、唯其略傳を一言するに止む。軻は、魯の公族孟孫の後にして、學を子思（前出）の門人に受け、梁齊宋滕等の諸國に遊説せるも、當時合従連衡攻伐を以て賢となし、遂に道を行ふの地を得ず。退きて弟子と學を講じ、孔子の意を祖述するに勉む。「孟子」は實に其説を集めたるものなり。○浩然の氣「孟子」公孫丑上篇に、「我善養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間」とあるを云ふ。浩然とは、盛大流行の貌、氣とは

體の充なりとあつて、即ち人の體に充つるもの、謂なるが、善養すれば、天地の間にも塞がるものなりと云ふ。文天祥の謂ゆる「正氣」も同じものにて、人の得て以て生れ、仁義忠孝の道由りて以て立つものを云へるなれば、大白道人の云へる「事ふる所の天」と云ふも同じものなり。○臍輪氣海丹田 既に序釋中に述べたるが、臍下の部分を云ふなり。即ち浩然の氣を率ゐて臍下丹田に藏めてと云ふなり。率ゐ藏むとは、他に散らざる様にするなり。○是を守つて守一にし去り是を養ふて無適にし去つて 是を守つて、是を養ふてと云へるは、共に浩然の氣を守り養ふ事を指すなり。守一といひ、無適といふ語は、程朱學派の術語に、敬の義を述べて「主一無適」といふより、之を取りて用ひたるなり。主一に代ふるに守一（此語、序文の革囊の釋中に引ける文中にも見えたり）を以てせしは、其義同じうして、「内經」にも用ふる所なればなり。「二程遺書」の中に、程伊川の語に、「所謂敬者、主一之謂敬、所謂一者、無適之謂一」とあり。朱子は之を合せて、「主一無適、之謂敬」と云へり。即ち主一とは、心を一事に專注するなり。無適とは、餘事に適かざるなり。去り、去つては、序釋中に「將去る」の語を助語なりと云へる如く、是等も

助語なり。即ちこの意は、浩然の氣を守一無適に守り養ひてといふに同じく、一心不亂に守り養ひてといふなり。○丹竈を掀翻する則は 丹竈とは、仙人が仙丹を煉るかまどなり。掀翻とは、あげひるがへすにて、毯を掌中にころく弄ぶが如く自由自在にする事を云ふ。されば、此處にては、丹竈を掀翻するとは、仙人が丹竈を自由自在に取扱つて金丹を作り出すが如く、以上の如く浩然の氣を守り養うて、遂に之を養ひ得たる時はいふなり。○内外中間八絃四維總に是一枚の大還丹 内外とは、身の内外なり。中間とは、天地間なり。八絃とは、八つのなは、りの義なるが、東西南北 乾 坤 巽 艮 の八方の事を云ふ。四維とは、四つのつな、の義なるが、東西南北の四方の事を云ふ。大還丹とは、序文中に云へる九轉還丹の事にて、即ち仙人の金丹なり。即ちこの意は、我身も天地と融合し去つて、天地間に唯是れ一枚の廣大なる仙丹となり了ると云ふにて、此は即ち有形を以て譬へ云へるなるが、言ふ意は、以上の如く浩然の氣を養ひ得たる時は、孟子の謂はゆる天地の間に塞がると云ふ如く、或は大白道人の謂はゆる我が天を以て事ふる所の天に合すと云ふ如く、其浩然の氣即ち我が身の元氣が、天地間の大元氣と融合々體して一とな

ると云ふなり。

此の時に當つて、初めて自己即ち是れ天地に先ちて生せず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是を眞正丹竈功成る底の時節とす。豈風に御し、霞に跨り、地を縮め、水を踏む等の鎖末たる幻事を以て懐とする者ならんや。大洋を攪いて酥酪とし、厚土を變じて黄金とす。前賢曰く、丹は丹田なり。液は肺液なり。肺液を以て丹田に還す。是の故に金液還丹といふ。

○天地に先ちて生せず虚空に後れて死せざる 序文中に「虚空に先ちて死せず虚空に後れて生せざる」とありしと同義なり。即ち其處に釋せるが如く、天地と其壽命を共にすとの義なり。こゝは即ち前段よりの續きにて、我が元氣と天地の元氣と合體する時、其時に當つて、我は天地と其壽命を同じうする長生不死の仙人なりといふ程の自覺を得んと云ふなり。○眞正丹竈功成る 丹竈功成るとは、文字通りには、丹竈煉丹の功成つて、金丹出來せりとの義なれど、是も例の有形を以て譬へ云へるにて、丹田鍊氣の功成る事を云ふなり。○風に御し霞に跨り地を縮め水を踏む 風に乗り、霞に乗り、地を縮め、水を渡るなどの事は、皆仙人の行ふ幻術なり。此中、地を縮むとは、序釋中の費長房の傳の中に出でたる所謂縮地の術にて、「神仙傳」に、「費長房遇壺公、有神術。能縮地脉、千里聚在目前。放之復如舊」とあるにて明かなるべく、即ち一時地脉を縮めて、千里の遠き所も、目前に在るが如く見えしむる術なり。○懐とする者ならんや 懐は、胸懐、胸臆などいふに同じく、念とする者ならんやと云ふも同じ。即ち上述の如き些々たる末技の幻術を目的とするの徒ならんやと云ふにて、鍊氣長生の人ば、眞箇長生久視の大神仙にて、幻術を以て事

とするが如き小仙にあらずと云ふなり。○大洋を攪いて酥酪とし厚土を變じて黄金とす。此二句も、仙人の幻術を云ふなり。酥酪とは、酪は牛羊の乳汁を煮沸して製したる漿にて、酥は酪の上部に一重の凝りをなせるものを云ふ。酥は又蘇とも書し、之に生蘇と熟蘇との別あり。此酥を更に製したるものが即ち醜醜なり。厚土を變じて黄金となすとは、文字通りの意なるが、又鐵を點して金と成す（點は滅なり）とも云ふなり。扱此二句も、幻術の事を云へるなるが、實は前の「水を踏む」の下に續けてよき者なるを、強ひて離したるは、修辭の變化を尊びたるものなるべし。されば、此二句の下にも、「**口とするものならんや**」といふ意の籠れるものと見るべし。○前賢曰く丹は丹田なり液は肺液なり肺液を以て丹田に還す是故に金液還丹といふ。肺液の液は、血液なり。肺液を以て丹田に還すとは、肺金の血液を腎水に循環降下せしむるを云ふなり。故に是を金液還丹と云ふと云ふなり。即ち仙藥の還丹を練氣の方に取りなして説明したるなり。

予が曰く、謹んで命を聞いつ。且らく禪觀を抛下し、

努め力めて治するを以て斯とせん。恐るゝ所は、李士才が謂ゆる清降に偏なる者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからんか。

○禪觀を抛下し 禪學を修むる事を止めてとなり。○治するを以て期とせん 我が禪病を平癒せしむる事を所期とせんと云ふにて、專一に我が禪病平癒を期待し希はんと云ふなり。○李士才 明代の醫にて、「醫宗必讀」の著者なり。○清降に偏なる者にあらずや 清降に偏なるとは、李士才が「醫宗必讀」の中に、丹溪の醫法を評して云へるものにて、清降とは、清涼劑を以て心火を降下せしむる事をいふなり。即ち「醫宗必讀」に、「如仲景、張機、守眞（劉元素）、東垣（李果）、丹溪、朱震享」其所立言、醫林最重、名曰四大家。（中略）。不善學者、師仲景而過、則偏于峻重、即守眞而過、則偏于苦寒、師東垣而過、則偏于外補、師丹溪而過、則偏于清降。（中略）。丹溪以補腎養血爲急、血爲陰主下降。虛者多上

逆故、補血藥中加黃栢知母、飲而降之、以象秋冬之降ことあるもの是なり。即ち禪師の意は、氣血を丹田に充たしむるの法は、李士才が謂ふ所の清降の方に偏し過ぎたる方法にあらざるかを恐るとなり。○氣血或は滯碍する事なからんか、公の説かるゝ所の如く、心を丹田の一處に制止せば、其爲めに氣血が停滯する如き事はなかるべきか如何と、我が疑團を打出でて、白幽の説を確め糺せるなり。滯碍の碍は、礙の俗字にて、杜甫の句に「干事少滯礙」とあるが如く、滯礙とは、こぼりの義なり。

幽微々として笑つて云く、然らず。李氏いはずや、火の性は炎上なり。宜しく是を下らしむべし。水の性は下れるに就く。宜しく是を上らしむべし。水上り火下る。是を名けて交と云ふ。交る則は既濟とす。交

らざる則は未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂ゆる清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はんとなり。

○火の性は炎上なり。炎上とは、燃え上るなり。扱此句より、「不交は死の象なり」といふ迄は、「醫宗心讀」の文を指せるなり。即ち「天地造化之機、水火而已矣。宜乎不宜偏、宜交不宜分。火性炎上、故宜使之下、水性就下、故宜使之上。水上火下、名之曰交。交則爲既濟、不交則爲未濟、交者生之象、不交死之象也。故大旱物不生、火偏盛也。大澇物亦不生、水偏盛也。煦之以陽光、濡之以雨露、水火和平、物將蕃滋、自然之理也。人身之水火、即陰陽也、即氣血也」とある是なり。○既濟「易」の卦の名なり。離下坎上の卦
二三三 是なり。離は火、坎は水にて、水火の交はり和せる象なり。是れ事物の既に濟り了れる位にて、既濟と云ふ。天地は萬物を生ずるの体にて、水火は萬物を成すの用なり。

故に大象に「水在火上既濟」とあり、即ち生の象たるなり。○未濟 此も「易」の卦の名にて、前者と反對に、坎下離上の卦三三三三なり。此卦にては、水火は相対ひ相對すれども、未だ相交らざるなり。是れ事の未だ成らざる位にて、未濟と云ふ。即ち死の象たるなり、○丹溪を學ぶ者の弊を救はんとし、李士才が清降に偏なりと云へるは、清降は惡しと云へるにあらす、丹溪を學ぶ者の清降に偏するの弊を指摘せるにて、要は共に偏するは惡しと戒めたるのみ。清降其者の必要は認めたるなりとの意なり。

古人曰く、相火上り易きは身中の苦む所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり。君火は上に居して靜を主どり、相火は下に處して動を主どる。君火は是れ一心の主なり。相火は宰輔たり。蓋し

相火に兩般あり。謂ゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是の故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か、水にあらずと云ふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや。

○相火 火に君相の二義ありて、相火は下に處して動を主どるものなる事、丹溪の「相火論」又本文中にも述ぶる所の如し。即ち腎肝の相火の上らんとすれば、身中苦むなり。腎水は即ち此相火を制する補物たりとなり。古人曰くとあれど、文句通りの出典を知らず。唐

の醫家啓支于玉冰の論に、「壯水之源、以制陽光、益火之主、以消陰翳」とありて、李士才は之を敷衍して、「水不足者、用六味丸、壯水之源、以制陽光、火不足者、用八味丸、益火之主、以消陰翳」と云へるなどの意を取りて云へるものか。○火に君相の二義あり。君火は即ち心火にして、相火は即ち腎肝などの火なり。此より以下段末までは、丹溪の「相火論」に云へる所を以て之を述べたり。即ち「天主生物、故恒於動、人有此生、亦恒於動。其所以恒於動者、皆相火之爲也。見於天者、出於龍雷、則木之氣也。出於海、則水之氣也。具於人者、寄於肝腎二部。(中略)。故雷非伏、龍非蟄、海非附於地、則不能鳴、不能飛、不能波也。鳴也飛也波也、動而爲火者也。肝腎之陰、悉具相火、人而同乎天也」とある是なり。○肝は雷に比し腎は龍に比す。肝は木に當り、龍は木の氣なれば、肝は雷に比すと云ふなり。又腎は水に當り、龍は水の氣なれば、腎は龍に比すと云ふなり。○龍をして海底に歸せしめば必ず迅發の雷なけん。此は、此の次の句と共に、龍と雷と相會へば、すさまじき現象を呈すれども、兩者相會はずば、すさまじき現象を呈する事なしと云へるなり。即ち龍若し海底に潛まば、迅雷の起る事もなく、但しは

又雷若し澤中に籠らば、飛龍の上る事もなからんと云ふなり。○海か澤か。海も澤もの義なり。○相火上り易きを制するの語にあらずや。海も澤も水にて、木の氣の龍、水の氣の雷、いづれも水にあらば、迅雷飛龍などの激動する事なけんと云ふなれば、其雷に比する肝、龍に比する腎二者の相火も、能く腎水に交らしむる事を得ば、上り易き相火も制せらるとの意となるなり。故に此句あるなり。

又曰く、心勞煩する則は、虚して心熱す。心虚する則は、是を補するに心を下して以て腎に交ふ。是を補といふ。既濟の道なり。公先に心火逆上して、此の重病を發す。若し心を降下せずんば、縦ひ三界の秘密を行使盡したりとも、起つ事得じ。且つ又我が形模、道家

者流しやりゅうに類るするを以もつて、大おほいに釋しよくに異ことなる者ものとするか。是これ禪ぜんなり。他日たじつ打發だはつせば、大おほいに笑わらひつべきの事こと有あらむ。

○虚して心熱す 虚すとは、血氣の衰ひ盡くるを云ふなり。然る時は、心火逆上して熱すとなり。○心を下して以て腎に交ふ 心火を降下して腎水に交らしむるにて、是れ心虚を補足する所以にして、是を補と云ひ、「一易」の道にては、既濟の理に當れりと云ふなり。○此重病を發す 其の爲めに、公の今罹り居るが如き重症を發せしにはあらずやと云ふなり。○三界の秘密を行じ盡したりとも 三界とは、一切衆生の生死輪廻する三種の世界、即ち欲界、色界、無色界を云ふなり。人界の下に地獄界あり。人界の上に天處あり。天處は分れて、四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天となる。此六天と人界と地獄界とを合せて欲界と云ふなり。扱此欲界を過ぎて、更に四重の天處あり。初禪天、第二禪天、第三禪天、第四禪天是なり。此四天を色界と云ふなり。此色界の上に、更に四天處あり。識無邊處、空無邊處、無所有處、非想非々想處是なり。此四天處を無色界と云

ふなり。秘密とは、秘密法の義にて、秘して顯はさざるの法、即ち其旨甚深不可思議にして、容易く窺ひ知るべからざるの法を云ふ。扱三界の秘密を行じ盡したりともと云へるは、如何なる事をしてもといふ意を、極端に強めて云へる喩言なり。○形模 形状模様の義にて、風采などいふ程の意なり。○道家者流 漢土の道教を奉ずる者をいふにて、老子を祖述するものなる事、前に述べし所の如し。○釋 釋とは、釋教にて、即ち佛教なり。○是れ禪なり 我が説く所やがて是れ禪なりと云ふなり。即ち我が説く所、醫道に涉り、仙道に涉り、又道教に類するが如きも、而かも是れやがて禪理に一致するものにして、即ち釋教の中を出でざるものなりと云ふなり。此語、本書一卷の所説の成立を自白して餘蘊なきもの、大に注目を要す。斯くて、以下釋教の方より説を立てて、仙醫佛學竟同理なる事を明さんとするなり。○他日打發せば 打は助辭なる事、前述の如し。打發とは、發明といふ義なり。他日自ら發明悟入する所あらば、我が今日の所説の基く所を知る事を得て、破顔一笑する事あらんとなり。

夫れ觀は、無觀を以て正觀とす。多觀の者を邪觀とす。向に公多觀を以て此の重症を見る。今是を救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん。是れ眞觀、清淨觀なり。云ふ事なかれ、しばらく禪觀を抛下せんと。佛の言く、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿含に酥を用ゆるの法あり。心の勞疲を

救ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡せり。治法を説く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり。よく衆病を治す。臍輪を縁して豆子を見るの法あり。其の大意、心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但病を治するのみにあらず。大に禪觀を助く。

○觀 梵語の毘婆舍那の譯にして、細なる分別心を云ふ。之に對して麁なる分別心を覺といふなり。○無觀を以て正觀とす 無觀とは、分別せざる事を云ふなり。是れ眞正の觀なりとなり。○多觀の者を邪觀とす 多觀とは、多岐に涉りて分別を費すなり。是れ邪觀の

觀なりとなり。○丹田及び足心の間 足心とは、足の裏の土つかずなる事、序釋中に述べし所の如し。即ち臍下の丹田より足心に至る迄の間といふなり。○胸膈 胸の中なり。○計較思想 計較の較は、角に通じて、きそふの義、即ち計較とは、人と競争する心なり。思想とは、こゝにては、思ひ煩ふ心なり。○識浪情波 識は理性にて、情は感情なり。其騒ぎ立ちて靜ならざるを波浪に譬へ云へるなり。○眞觀清淨觀 眞觀と清淨觀との二觀にて、「法華經」普門品（同時に觀音經にも）出でたる觀音の五觀の中なり。即ち「眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰」とある始めの二觀是なり。先づ觀に空假中の三觀あり。惑に見思、塵沙、無明の三惑あり。而して、此三觀を以て三惑を斷するなるが（即ち空觀にて見思の惑を斷じ、假觀にて塵沙の惑を斷じ、中觀にて無明の惑を斷ず）、扱眞觀とは、眞諦の理を觀るが故に眞觀と云ふにて、即ち空觀なり。清淨觀とは、空觀を以て見思の惑を除きて、其次に假觀を修する（塵沙を斷ずる）が故に、見思の汚れなきに約して、假觀を清淨觀と云ふなり。因みに云ふ、廣大智慧觀とは、即ち中道正觀にて、悲觀及び慈觀とは、上の三觀を以て衆生の苦を抜くは、即ち悲觀にて、三觀を以て衆生を觀じ、以て

衆生に樂を與ふるは、即ち慈觀なり。猶精しくは、專門書に就きて究むるの外なし。○云ふ事なかれしばらく禪觀を抛下せんと 是れ前に禪師が「且らく禪觀を抛下し云々」と云へるに對して云へるにて、其意は、強ち禪觀を抛下するに及ばず。唯禪觀の仕方にあるのみ。禪觀をなすにも、多觀を以てする故に禪病を得るなり。無觀を以てせば眞觀清淨觀を得ん。されば、禪觀其者を否定すべきにあらず。唯禪觀の仕方を考ふべきのみと云ふなり。○心を足心にをさめて能く百一の病を治す 佛の言くとあれど、出典明かならず。百一の病とある、解し難し。前述の如く、地水火風の四大各々に就いて、夫れごとく百一の病あるなれば、四百四の病を治すとあるべき所なり。或は腎水の經脉が足心にめぐり居れば、水大に關する百一の疾病の義かと思へど、如何なるべき。○「止觀」には、「常止心於足者、能治一切病」とあり。此語を誤つて佛と引けるか。猶考ふべし。○阿含に酥を用ゆるの法あり 阿含とは、「阿含經」の事なり。釋迦が鹿野苑にて説きたる經にして、小乗の根本聖典となす所。「增一阿含經」、「長阿含經」、「中阿含經」、「雜阿含經」の四種あれば、具さには「四阿含經」と稱す。酥とは、前に酥酪とありし所にも之を述べしが、「近世時

人傳」の註には、「私云、酥は牛羊の乳を以てつくり、油に和す。諸瘡を治すといふ。凡膏藥のごとし」とあり。「臞仙神隱書」には、其製法を述べて、「以乳入釜、煎二三沸、傾入盆内、冷定待、面結皮、取皮再煎、油出去滓、入鍋内、即成酥油」とあり。扱酥を用ふるの法とは、一種の觀法にて、酥を頭上に注ぎて、其れが垂れ下りて、全身を清涼ならしむるが如き想をなすを云ふなり。精しき事は、本文中の後段に、白幽の言として出でたれば、茲に贅せず。○天台の摩訶止觀 天台は、天台宗なり。「摩訶止觀」とは、天台宗の開祖智者大師の述ぶる所にして、弟子章安の記録せる書なり。天台宗の觀心を説ける書にして、一家修行の本據とする所なり。十卷あり。其第八卷に、十乘觀法を説きたり。其中に、病患の境を觀するの法を説き、其中に、病因を論じ、治法を説く事、最も詳密なり。精しくは擧ぐるに暇あらず。附録中に述べ且つ引きたるものあれば、就いて見るべし。

○十二種の息あり能く衆病を治す 上述の卷に、「上息治沈重地、下息治虛懸風病、焦息治脹滿、溺息治枯瘠、增長息能生長四大、外道服氣、只應服此生長之氣耳、滅壞息散諸癩膜、冷息治熱、煖息治冷、衝息治癢結腫毒、持息治掉動不安、補息補虛乏、

和息通融四大。作諸息時、各隨心想、皆令成就、細知諸病、用諸息、勿誤用也」とあるを云ふなり。「小止觀」の治病にも、殆ど同様の事を述べたり。○臍輪を縁して豆子を見るの法あり 此事は、附録中に詳述したれば、就いて見るべし。○大に禪觀を助く「止觀」に、「此能治諸病、亦能發諸禪」(附録參看)などあるに依れるなるが、以て前の「云ふ事なかれ且らく禪觀を抛下せんと」の語に對應せるなり。

蓋し繫緣縮眞の二止あり。縮眞は實相の圓觀、繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是を用ゆるに大に利あり。古へ永平の開祖師、大宋に入つて如淨を天童に拜す。師一日密室に入つて益を請ふ。淨曰く、元子坐禪の時、心を左の掌の上に

おくべしと。是れ即ち顛師の謂ゆる繫縁止の大略なり。顛師初め此の繫縁内觀の秘訣を教へて、其の家兄鎮愼が重病を萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に説けり。

○繫縁諦眞の二止あり 此は、「摩訶止觀」の中に説ける事なり。止とは、止觀の止にて、觀は前述の如く細なる分別心の義なるが、觀と云ひ止と云ふは、實は坐禪三昧の上にて云ふにて、心を一點に集注せしむる三昧の境に入れば、心は全く靜止の状態となるなり。是を名けて止と云ふなり。又此止の状態に至れば、其集注せられたる一點が、明瞭に顯現し來るなり。是を名けて觀と云ふなり。諦眞止とは、又體眞止ともありて、無明轉倒の迷妄の其儘が實相眞如なりと體達するを云ひ、繫縁止とは、方便隨縁止とも云ひて、縁に隨うて内外の變化に心を動さざるを云ふなり。○諦眞は實相の圓觀 實相とは、萬有の有りの

儘のすがたといふ程の義なり。圓觀とは、圓教の觀心といふ事にて、圓教とは、圓妙の教の義にて、諸法實相の旨を教ふる天臺の教などを云ふなり。即ち實相の圓觀とは、萬有の實相には、相對と絶對との二面あり。相對的方面より云へば、萬有互に異なれども、絶對的方面より云へば、萬有皆平等にして、一々の者が絶對なり。而して此二面は、全く同一にして、相對其の儘絶對、絶對其の儘相對なれば、凡て皆虛妄のものなしと觀するなり。然るに、諦眞とは、上述の如く迷妄即ち實相と觀するなれば、諦眞は實相の圓觀とは云へるなり。○繫縁は心氣を云々 此も上述の繫縁止の解にて明なるべし。猶禪師の「遠羅天釜」の中に、「蓋し摩訶止觀の中に、假縁止、諦眞止と申す事の侍り。只今申し談する内觀の法とは、かの假縁止の大略にて侍り」とあるを見合せて知るべし。○永平の開祖師 開祖師の語、不熟なり。「闡提記聞」に引用せる文には、「我朝永平道元禪師」とあり。「練丹秘要」には、「永平開祖」とあり。「練丹秘要」は、本書の後に漢文として出でたるものなれば、同書に従つて「師」の一字を除く可とす。永平とは、越前志比の永平寺なり。當寺の開祖は、道元禪師にして、禪師は、我が國曹洞宗の祖なり。初め建仁寺に榮西に謁

して禪宗に歸し、貞應二年、宋に渡り、如淨に従つて、曹洞宗の秘要を受け、歸朝して建仁寺に寓す。寛元二年、波多野義重、大佛寺（後に永平寺となる）を創立して師を請す。建長五年寂す。壽五十四。○如淨を天童に拜す。如淨は、上述の如く宋人にして、曹洞宗の高僧なり。法を雪竇智鑑に嗣ぐ。南宋の紹定元年寂す。壽六十六。天童は、支那五山の一なる天童山景德寺にして、天童山は、明州慶元府にあり。是に由つて如淨の號を天童とも云ふ。○師一日密室に入つて益を請ふ。師とは、道元の事なり。密室とは、修禪の室にて、こゝは如淨の密室なり。益を請ふとは、益ある教を聞かんと請ふなり。○元子坐禪の時心を左の掌の上におくべし。元子とは、道元子といふべき上の一字を省き稱せるなり。子は敬稱なり。坐禪の時心を左の掌の上におくべしとは、心を氣海丹田に定むべしといふと全く同じ意味にて、即ち坐禪の正儀としては、右の足を左の股の上に置き、左の足を右の股の上に置き、右の手を仰のけて左の脛の上に置き、左の手を仰けて右の掌の上に重れ、兩手の拇指を向へ拵ふるなり。（行法の他の部分は、繁を厭うて略す）されば、「正菴法語」にも、「心を左掌の内に安住して、氣は丹田腰脚等に充塞せしめよ」と云へり。○頭師 智

者大師の事なり。名を智顛と云ひたればなり。○鎮愼 智者大師の俗兄にして、或は陳鍼、陳秦なども書けり。大師の「小止觀」は、此人の爲めに説きたるものなり。杭州法華山刻の「小止觀」の末尾には、此人の傳を載せたり。附録に引きたれば、就いて見るべし。遠羅天釜」の中にも、「此の方始め金仙氏（釋迦なり）に起つて、中頃天台の智者大師に到つて、大に勞疲の重病を治し、且つ其の兄陳秦が必死を救ふ、澆末難遭の靈方なり」とあり。○小止觀 上述の如く、智者大師の著にて、正しくは「修習止觀座禪法要」と云ふ。俗兄鎮愼の爲めに、圓頓止觀の楷梯を勲るに示したるものなり。上略して「座禪法要」とも、又「童蒙止觀」とも云ふ。

また白雲和尚曰く、我常に心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し、衆を領し、賓を接し、機に應じ、及び小參普說七縱八橫の間に於いて、是を用ひて盡くる事

なし。老來殊に利益多き事を覺ゆと。寔に貴ぶべし。是れ蓋し素問に謂ゆる恬澹虚無なれば、眞氣これにしたがふ。精神内に守らば、病何れより來らんといふ語に本づき玉ふものならむか。且つ夫れ内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。是れ生を養ふ至要なる事を知るべし。

○白雲和尚 白雲といふ禪師、和漢共にあり。本文に引ける語の出典を知られば、其誰なるかを詳にせず。漢土にては、有名なる守端禪師あり。宋の衡州の人にて、臨濟の名僧な

り。本朝にては、東福寺の佛照禪師あり。字を白雲と云ふ。聖一國師に禪要を聴き、後宋に渡り、歸來隱遁して東福寺に入り、永仁五年寂す。又建長寺の佛頂禪師あり。同じく字を白雲と云ふ。貞和二年、八十四にて寂す。暫く記して疑を存す。○常に心をして腔子の中に充たしむ 腔とは、かこひの義にて、外に圍ひある事を云ふなり。こゝにては腹を云ふなり。子とは、助語に過ぎず。扱此語は、程明道の「此心常使在腔子内」の語より來り。○徒を匡し衆を領し 同輩の言行を匡正し、家來從者を統御しとなり。○賓を接し機に應じ 客人を接待し、又臨機應變の處置をなしとなり。○小參普說七縱八横の間に於いて 小參とは、自己一人の參學、普說とは、人に向つて普く教を説く事なり。七縱八横とは、縦横に入り亂れたる義にて、即ち自行化他の紛糾錯綜せる間に於いてとなり。こゝの「間に於いて」は、上の「徒を匡し」より以下凡てを受くるなり。○是を用ひて盡くる事なし 是をとば、腔子の中に充たしめたる心なり。如上諸種の行事の間に心を使ひても、更に勞疲する事なしとなり。○素問「黄帝内經」の一部の名なる事、凡例に述ぶる所の如し。○恬澹虚無なれば眞氣之に従ふ 此句は、次の句と共に、「素問」の「夫上古聖人之教下

也、皆謂之虛邪賊風、避之有時、恬憺虛無、眞氣從之、精神內守、病安從來」とあるより来るなり、恬澹とは、靜かなる事を云ふ。即ち恬澹虚無にして、心を勞する事なければ、元氣おのづから滿ち張るとなり。○精神内に守らば病何れより來らん 精神即ち元氣を身内に守り留めて逸せしめざれば、身内に附け入るべき空虚なきが故に、病邪は外より入らずとなり。○三百六十の骨節 醫書に、骨の總數を三百六十五節とあるを、今大數を擧げて三百六十と云へるなり。○八萬四千の毛竅 毛竅とは、毛孔といふに同じ。此數は、佛家の所説に據るなり。○一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す 上述の如く、元氣をして一身の中に充たしめ、其充たしめ方が、三百六十の骨節や、八萬四千の毛孔にも、一として元氣の缺けたる所なき様ならしめん事を要すとなり。

彭祖が曰く、和神導氣の法、當に深く密室を鎖し、牀を安じ、席を煖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑

目して心氣を胸膈の中に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて動かざる事三百息を経て、耳聞く處なく、目見る所なく、斯の如くなる則は、寒暑も侵す事能はず。蜂蠆も毒する事能はず。壽三百六十歳、是れ眞人に近しと。

○彭祖 八百歳の長壽を保ちし仙人なる事、序釋中に述べし所の如し。○和神導氣 精神を和げ治め、心氣を養ひ導くの義にて、即ち鍊氣養生といふに等し。○牀を安じ 臥床を置きてとなり。○席を煖め 床の上に敷くべき敷物を煖めて床上に敷きてとなり。○正身偃臥し 姿勢を正しうして、仰のけに臥してとなり。○鴻毛 鴻は、鷹の一種にて、おほとりと云ひ、普通の鷹よりは稍大なり。鴻毛とは、此鳥の羽毛にて、「史記」に、「衝風之末力、不能漂鴻毛」とあるなどの如く、極めて輕きものとせられたり。○鼻上につけて動かざる事三百息を経て 呼吸幽かになりて、鼻腔上に鴻毛をかざしても、更に動かざ

るやうなりてより、猶三百息を経てとなり。○蜂蟻 蟻は、似我蜂にて、和名さそり、又
すがるなどいへり。○真人 既に屢出でたり。

又蘇内翰が曰く、已に飢ゑて方に食し、未だ飽かずし
て先づ止む。散歩逍遙して、務めて腹をして空しから
しめ、腹の空なる時に當つて、即ち静室に入り、端坐
默然して出入の息を數へよ。一息より數へて十に到り、
十より數へて百に到り、百より數へ放ち去つて千に到
りて、此の身兀然として、此の心寂然たる事、虚空と
等し。斯の如くなる事久ふして、一息おのづから止ま

り、出でず入らざる時、此の息八萬四千の毛竅の中よ
り、雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、
諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然
として眼を開くが如けん。此の時人に尋ねて路頭を指
す事を用ひず。只要す、尋常言語を省略して、爾の元
氣を長養せん事を。是の故に云ふ、目力を養ふ者は常
に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常
に黙すと。

○蘇内翰 宋の蘇軾即ち東坡居士の事なり。眉州眉山の人、弱冠にして博く經史に通じ、文を屬する事日に數千言なり。嘉祐二年、弟轍と同じく禮部に試みられ、第二に登る。後累官して翰、學士兵部尙書に至る。内翰とは、即ち翰林學士の謂なり。室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す。詩文に兼長するに於いて、宋代に比なし。又深く佛に通じ、畫を善くす。建中靖國元年、常州に卒す。年六十六。文忠と諡し、資政院學士を贈らる。猶東坡自ら辨道の士なりし事は、「遠羅天釜」の中に、不斷坐禪の活例として、黃魯直、張子成、張天樂、郭功甫等と共に、蘇内翰をも擧げたるを以ても知るべし。○出入の息を數へよ。是れ佛家に謂はゆる數息觀の事を云ふなり。數息觀は、五停心觀（不淨觀、慈悲觀、因緣觀、界差別觀、數息觀）の一にして、又持息念とも云ひ、出入の息を念持して其數を計り、以て散亂する心を對治する觀法なり。○百より數へ放ち去つて千に到りて 放ち去つての語、意味をなさす。「闡提記聞」所引の文には、「從百數至數百」とありて、文も稍異なり、斯る語もなし。「鍊丹秘要」には、「將去^{モチテ}」とあり。されば、本書にももと「將去つて」とありしものか。然らば、例の助語なれば、前後の意味には闕せず、無きに等し。

○此身兀然として 兀然とは、こゝにては、動かざる貌に云ふなり。即ち息を數へて千に到れば、其身寂然として動かざるに至ると云ふなり。○無始劫來の諸病自ら除き 無始劫來とは、無始劫以來の義にて、無始以來と云ふも略同じ。無始とは、其始めを知らざる程の久遠長大の過去を假定するなり。劫とは、既に述べしが如く、非常に長き時間の單位なり。天人が、方高四十里の石を、重き三銖の天衣を以て、三年に一度拂拭し、遂に其石の盡くるに至る間を一切（是を拂石劫と稱す）となすなり。されば、無始劫來とは、其始めの知らざる程久しき以前の劫時よりとの義なり。毛竅より諸病諸障の除滅すといふ事、虛同の「平生不平事、盡向毛孔散」の句と對し見ば、興味深かるべし。○人に尋れて路頭を指す事を用ひず 路上を指して、此處は何處なるか、何方へは如何に行くべきかなど、問ふべからずとなり。○只要尋常言語を省略して云々 此句も、盲人の譬喩に就いて云へるなるべし。さすれば、一々言語を以て問ひ糺す事を止めて、自ら常に自己の元氣を養はん事を勉むべし（爾とは、盲人を二人稱として云へるなり）。元氣養はれ充つれば、人に問はずとも、自己自らにて道路の方角を知る事を得べしとの意なるべし。尋常とは、常にの意

なり。○目力を養ふ者は常に瞑し 此句と次の句とは、「荷氏遺書」といふ醫書の句なりと「講義」にあり。即ち「養耳力者常飽、養目力者常瞑、養臂指者常屈伸、養股趾者常步履」とある始めの二句なり。瞑とは、目をつぶる事、飽とは、厭飽の飽にて、聞く事を避け居るなり。原文に「耳力」とあるを、耳根と代へて引けるは、耳は六根（既出）の一なれば、根の字に代へたるなり。扱「心氣を養ふ者は常に黙す」の一句は、原文になし。こは恐らく蘇内翰自らの附け添へたるものなるべし。而して、此一句を添へたるは、自説に必要なが爲めなるは勿論なれど、亦或は庚申三猿の不視不聽不言に思ひ寄せたるにはあらぬか。原文にては、耳目と順序せるに、其を轉換して目耳として、之に口を加へたるも、故あるべく思はる。三猿の事實に就いては、「遠碧軒隨筆」には、智者大師、「止観」の空假中の三蹄を、不視不聽不言に比したる事あり。我が傳教大師、之を猿に表して、三つの猿を刻めりとかやとあれど、「和漢三才圖會」には、庚申會は、もと支那朝鮮にありて、道家の説に出で、人の身には、彭候子、彭常子、命兒子（書に由つて異同ありの三戸といふものありて、常に主體の爲す所の罪を伺ひ居り、庚申の日毎に上帝に上りて告ぐる

故に、此夜寝れずして、三戸を守るなりと云ふ。（「燈籠抄」によれば、三戸の事は、「老子三戸經」といふに出でたりと云ふ）。此事の日本に傳はりしは、文徳帝の時、智證大師唐より傳へ來りしにて、天慶二年始めて内裏にて庚申の御遊ありきと云ふ。三猿は、不視不聽不言の戒めにて、僧家の附會に成り、庚申は支干五行の比和するもの、一にて（此事は、八專などの理を参考すべし）、此日は最も交合を忌み、其夜寝れずして守るが故に、釋家亦此日を利用して、勸善懲惡の方便となしものなりとあり。實は三猿の附會は、漢土に於いてなるか日本に於いてなるかに就いては、確實なる材料は得難きなるが、若し此蘇内翰の語が、三猿の事實によれるものなりとせば、既に早く漢土に於いて、此附會のありし事を證すべき一資料とはならざるか。姑く記して後考に備ふ。

予が曰く、酥を用ゆるの法得て聞いつべしや。幽が曰く、行者定中四大調和せず、身心ともに勞疲する事を

覺せば、心を起して應に此の想を成すべし。譬へば色
 香清淨の輕酥鴨卵の大さの如くなる者、頂上に頓在せ
 んに、其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるほし、
 浸々として潤下し來つて、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の
 間、肺肝腸胃、脊梁腎骨、次第に沾注し將ち去る。此
 の時に當つて、胸中の五積六聚、疝癖塊痛、心に隨つ
 て降下する事、水の下につくが如く、歷々として聲あ
 り。逼身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至つて即ち

止む。

○行者定中四大調和せず 行者とは、修行者といふに同じく、禪學を修行する人なり。定
 中とは、禪定中の義にて、坐禪をなし居る中にと云ふなり。四大とは、既に述べしが如く、
 地水火風なり。是が調和せざる時は、前に「四大増損して各々百一の病を生ず」とありし
 が如く、身心の故障を生ずるなり。○懸に此の想を成すべし 想とは、觀法といふが如く、
 實際然か爲し居るにあらざれども、然か爲し居るが如く想ひなす事なり。此の想とは、即
 ち酥を用るの觀法なり。○頂上に頓在せんに 頭上に急に置くと假定せんにとなり。○頭
 顱 頭全體を云ふなり。○沾注し將ち去る 沾注とは、うるほし、ぬぐなり。將ち去るは、
 例の助語なり。即ち沾注すとあるに等し。○五積六聚疝癖塊痛 皆序釋中におりし事にて、
 五積六聚とは、五臟六腑の氣の滯りにて、即ち積氣の事、疝癖とは、疝氣にて、塊痛とは、
 局部の痛みなり。○心に隨つて降下する 下るよと想ひなす其想ひなしのまに、滯れ
 る氣血の降下すとなり。○歷々として聲あり 氣血の降る音が、はつきりと聞きなると
 なり。○雙脚を温潤し 脚部に向つて氣血の降るが故に、所謂頭寒足熱になるなり。

行者再び應に此の觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流、積り湛へて暖め蘸す事、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪以下を漬け蘸すが如し。此の觀をなす時唯心の所現の故に、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄かに妙好の輭觸を受く。身心調適なる事、一三十歳の時には遙かに勝れり。此の時に當つて、積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若し

夫れ勤めて怠らずんば、何の病か治せざらん。何の徳か積まざらん。何の仙か成ぜざる。何の道か成ぜざる。其の功驗の遲速は、行人の進修の精麤に依るらくのみ。

○餘流 再び觀想を新にするなれば、先に潤下したる輭酥の流の餘流あつて、今又潤下するが如く觀ぜらるゝより、餘流とは云へるなり。○唯心の所現の故に 唯心の解は、序釋中にも之を述べたるが、宇宙の終極的實存はたゞ心にして、外界の事物は其變現なりとの義なり。されば、唯心の所現とは、此本體たる心が、心外に其影像を變現せしむるを云ふにて、心に香氣を觀すれば、心外に香氣の顯現するを覺ゆべく、心に輭觸を觀すれば、心外に輭觸の顯現するを覺ゆべきなり。されば、こゝは、心に輭酥の觀をなせば、其觀心の影像心外に顯現するが故にとの意なり。○鼻根乍ち希有の香氣を聞き 鼻根とは、鼻は既に説けるが如く六根の一なるが故に斯く云ふにて、唯鼻といふに同じ。扱心に輭酥を觀す

るが故に、軟酥には又香氣あれば、軟酥の觀は、自然其の香氣をも觀するに至るを以て、其心外に顯現せる影像として、鼻に香氣を聞くに至るなり。聞くとは、香を嗅ぐ事なり。漢土以來の用語なり。○身根俄かに妙好の軟觸を受く。身根とは、此も六根の一なるを以て、斯く云ふなり。軟觸とは、軟酥の肌に觸るゝ軟かなる觸れ心地なり。軟觸を受くるの理、香氣の場合に同じ。○調適 といひ、ひかなふの義なり。序文に、「身心健康氣力は次第に二三十歳の時には遙かに勝されり」とあるを見合すべし。○積聚 五積六聚の略なり。○行人 前に行者と云へるに等し。

走始め卍歳の時、多病にして、公の患に十倍しき。衆醫總に顧みざるに到る。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此に於て、上下の神祇に祈つて、天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや、計らずも此の軟酥の

妙術を傳受する事を。歡喜に堪へず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半消除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。

○走始め卍歳の時 走とは、もと下僕の事なるが、又自ら卑下して稱する自稱にも用ふ。こゝは自稱なり。又下走とも熟す。卍歳とは、卍は「詩經」に「總角卍兮」とあるが如く、あげまきの貌に云ふ字なれば、幼少の時といふ義なり。○百端 端はしなの義にて、種々の手段方法をといふなり。○上下の神祇 上は天にて、下は地なり。即ち天神地祇なり。○天仙の冥助 天仙とは、天上の仙の義なるべく、こゝにては、神祇を指して云へるが如し。例へば、序釋中に引ける「般若燈論」に、菩薩聲聞をも仙と名け、佛を大仙と名くとありしが如く、神も長生不死なれば、天仙と云へるなるべし。冥助とは、幽冥の界に在つて人間を救助するの義にて、神佛の加護救済を云ふなり。因に云ふ、仙人的長壽法の主張者無

々道人河合清丸氏は、仙に三等ありとなし、其下等の人仙といふ。人間に在つて仙術を修行する者にて、其得力の所は益壽延年に在り。其中等を地仙といふ。深山幽谷無人の地に在つて仙術を修行する者にて、其得力の所は不老不死に在り。其上等を天仙といふ。仙術の修行成就せる者にて、其得力の所は登遐昇天に在りと云へり。此意味の天仙は、登遐昇天して天上の者となりし仙なれど、こゝに云へる天仙の文字は、恐らく唯天上の仙の義にて、河合氏の云へるが如き意味には非るべし。○期月 一個月の事にて、既に釋せり。

癡々兀々月の大小を記せず。年の潤餘を知らず。世念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し。馬年今歲何十歳なる事もまた知らず。中頃端由有つて、若州の山中に潜遁する者大凡三十歳、世人

て知る事なし。其の中間を顧るに、恰も黄梁半熟の一夢の如し。今此の山中無人の處に向つて、此の枯槁の一具骨を放つて、大布の單衣纔に二三片を掛け、嚴冬の寒威綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するに到らず。山粒すてに斷えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の力ならずや。我今既に公に告ぐるに一生用ひ盡さざる底の秘訣を以てす。此の外更に何をか云は

んやと云つて、目を收めて黙坐す。予も亦涙を含んで
 禮辭す。

○癡々兀々 癡々とは、無智の貌にて、兀々とは、無知の貌なり。孫綽が「兀同體於白然」と云へるが如し。されば、癡々兀々とは、智なき事恰も痴者の如く、知らざる事恰も自然の如きを云ふなり。○月の大小を記せず 曆月に大の月と小の月とあり。其大の月なるか小の月なるかをも覺えずとなり。○年の潤餘を知らず 今年閏年なるか否かをも知らずとなり。閏とは、大陰曆にては、一年を三百六十日として十二箇月に分ち、其餘分の日子を積みて一箇月となせるもの、稱にて、三年に一回、五年に二回、十九年に七回あつて、其餘分盡くるなり。故に閏餘といふ語もありて、「史記」に「黄帝起消息、正閏餘」などあり。然るに、和語の「うるふ」の語は、即ち潤にて、潤ひて有餘あるの義なれば、こゝには和語の義に據りて潤餘と書けるなり。○世念 浮世心なり。○人欲の舊習 人欲は、人慾に等し。されば、浮世在來の風俗習儀と云はんが如し。○馬年 既に釋せし

が如く、己が齡の事なり。○端由 序釋中に述べしが如く、由緒といふに等し。こゝにては、理由あつてといはん程の意なり。○若州 若狹國なり。○中間 其間の義にて、若州潛遁の三十年間を指すなり。○黄梁半熟の一夢の如し 黄梁は、梁（おはあは）の一種なり。梁は、穗大にして長毛あり。故に毛粟とも云ひ、黄梁、白梁、青梁、赤梁、稻梁、稗梁等の種類あり。此中、白梁は餅とし、黄梁は炊きて飯とするものなり。黄梁を我國に譯して黍となすものあれど、實は我國の謂ゆる黍にはあらず。扱黄梁半熟の一夢とは、盧生が邯鄲の夢の故事を云へるなり。沈既濟の「枕中記」に記せる所にして、唐の開元七年、道士呂翁、邯鄲の邸舎（茶屋なり）に息ひて、少年盧生を見る。生其困を歎く。翁篋中の枕を操りて之に授け、之に枕せば、子が榮適意の如くなるべしと云ふ。生寐中に清河の崔氏の女を娶り、進士登第し、榮達累進、遂に燕國公に封ぜらる。兒孫多く、盛榮比なし。八十を逾えて官に卒す。生欠伸して寤むれば、身正に邸舎に臥せり。初め邸舎の主人黄梁を蒸して饌を爲せるもの、尙未だ熱せざるを見たり。翁生に謂つて曰く、人生の事亦是の如しと。生翁に従つて去るとあり。○枯槁の一具骨を放つて 枯槁とは、形容枯槁とありし

所に述べしが如く、枯れ衰へたる形なり。一具骨とは、具はそなはるなれば、骨節の具はれる一肉體の義なり。放つてとは、放置といふに同じく、上の「向つて」の語に對して放つてと云へるにて、向つて放つとは、畢竟其處に居付く事なり。○大布の單衣 既に釋せし如く、ふとぬののひとへなり。○二三片 二三枚なり。○寒威綿を折く 寒氣が綿をとほす義なり。是れ唯寒氣の程度を云へるにて、「大布の單衣云々」の句の上においても同じく、自己自ら綿入を著けたりと云ふにあらず。○山粒 山田に成れる米穀の義なるべし。○凍餒 序文に「晝餒夜凍」の語ありき。其處に釋せし如く、餒はかつゐる事、凍はこいゆる事なり。「孟子」に、「文王之氏、無凍餒之老者」などあるに出づ。○一生用ひ盡さざる底の秘訣 一生涯之を用立てても、猶其効驗の全部を盡す事能はざる程の秘法と云ふにて、即ち其効驗優に萬人が萬代に涉つて體用するに足る秘法と云ふなり。○目を收めて 既に云へるが如く、目を閉ぢてなり。○禮辭す 禮をなして辭し歸れりとなり。

徐々として洞口を下れば、木末纔かに殘陽を掛く。時

に屐聲の丁々として山谷に答ふるあり。且つ驚き且つ怪んで、畏づく回顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて、自ら送り來るを見る。即ち曰く、人跡不到の山路、西東分ち難し。恐くは歸客を惱せん。老夫しばらく歸程を導かんと云つて、大駒屐を著け、瘦鳩杖をひき、巖を踏み、嶮岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の溪水の處に到つて、即ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、

必ず白川の邑に到らんと云つて、慘然として別る。且らく柴立して、幽が回歩を目送するに、其の老歩の勇壯なる事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し。且つ羨み且つ敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事を。

○展聲の丁々として 展は、はきものにて、後に「大駒展」とある駒展を指すなり。駒展は、和様の熟字にて、駒下駄の事なれば、展聲とは、駒下駄の音を云ふなり。丁々とは、前にも述べし如く、本来は伐木の聲或は碁子の音の形容なるが、意味を廣めて、物の打つ音にも用ひられざるにあらねば、こゝは駒下駄の岩に當る音に用ひたるなり。○恐くは歸客を惱せん 歸客とは、禪師を指して云へるなり。惱せんは、文法上破格にて、正しくは

惱さんとあるべきなれども、當時漢學者流には、斯る讀癖少からざりしなり。○瘦鳩杖 鳩杖は、老人のつく杖にて、「後漢書」禮儀志に、「民年七十者、授之以玉杖、以鳩鳥爲飾。欲老人如鳩不噎也」とあるに出づ。こゝの瘦鳩杖とは、唯細き杖といふ意に過ぎずして、老翁がつき居る故、鳩の字を添へたるのみ。○峻巖 高き岩なる事、既に説ける所の如し。○慘然 前に「慘乎」とありしに等しく、いたむ貌なり。○柴立して幽が回歩を目送するに 柴立とは、柴の如く立つと云ふにて、佇立する事を云ふなり。回歩とは、歩を回らすにて、今來し方へ振りかへり向く事を云ふなり。幽が回歩を目送すとは、幽の洞窟の方へ歸り來 後姿を見送るなり。○飄然として世を遁れて羽化して登仙する 此句は、「前赤壁賦」に、「飄々乎、如遺世獨立、羽化而登仙」とあるを取れるなり。而して「賦」の句は、猶「莊子」天地篇の「千載厭世、去而上仙」の句に基けるものならんが、羽化とは、空中を飛行し得る様になる事を云ひ、登仙とは、天に上りて仙人となる事を云ふなり。

徐々として歸り來つて、時々、彼の内觀を潛修するに、

纜に三年に充たざるに、従前の衆病、薬餌を用ひず、
 鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみに
 あらず。従前手脚を挟む事を得ず、齒牙を下す事を得
 ざる底の難信難透難解難入底の一著子、根に透り底に
 徹して、透得過して大歡喜を得る者、大凡六七回。其
 の餘の小悟、恬悦踏舞を忘るゝ者數を知らず。妙喜の
 謂ゆる大悟十八度、小悟數を知らずと、初めて知る、
 寔に我を欺かざる事を。古へ二三兩の襪を著くといへ

ども、足心常に氷雪の底に浸すが如くする者、今既に
 三冬嚴寒の日といへども、襪せず爐せず。馬齒既に古
 稀を越えたりといへども、指すべき半點の小病も亦な
 き事は、彼の神術の餘勳ならんか。

○潜修 ひそかに修すの義にて、序文に「密々に精修す」とありしと同じ意なり。○任運
 に除遣す 任運とは、佛家の語にて、そのまゝ、又はひとりいになどの義。除遣とは、消
 遣などいふに同じきが、こゝにては自動に用ひたるにて、のぞかれはなたるの義なり。○
 手脚を挟む事を得ず 俗に「手も足も出ぬ」といふを譯せるにて、難信難透難解難入なる事
 に對して、施すべき術なきを形容して云へるなり。○齒牙を下す事を得ざる底の 俗に「齒
 が立たぬ」といふを譯せるにて、前の句と同じく、難解難入底なるに對して、我が力の及
 ばざるを形容して云へるなり。○難信難透難解難入底の一著子 難解難入の語は、「法華

經」の方便品に、「諸佛智慧、甚深無量、其智慧門、難解難入」とあり（此語に因つて難解難入の法華經と云ふ）。「金光明最勝王經」にも、「應當至心、聽是金光明最勝王經、於諸經中、最爲殊勝、難解難入、聲聞獨覺、所不能知」とあり。難解難入の文字は、同種の語として殊に添へたるが如し。難信とは、其旨甚深にして信に難き事、難透とは、其本旨に透徹し難き事、難解難入といふも、經文に云ふが如く、其旨深くして解し難く又入り難き事なり。一著子とは、一話頭といふ程の義、予は既に述べしが如く助字なり。○透得過して「闡揚記聞」中の文には、「透得」とのみあり。過の字は、有るも無きも同義なり。上の「根に透り底に徹して」を云ひ換へ強めたるにて、即ち根底に透徹する事を得てといふなり。○怡悅踏舞を忘るゝ者 前に「怡悅踏舞を忘るゝ者數月」とありし所に釋せしが如く、嬉しさの爲めに、己れ忘れて手の舞ひ足の踏む事との意なり。○妙喜 南宋の普覺禪師の事なり。孝宗皇帝親ら妙喜菴の三字を書し、讚を製して賜ひしが故に、妙喜とも異稱す。初め寶峰の湛室に謁し、後天寧の圓悟に見えて、豁然として大悟し、此より叢林浩然として、名聲京師に震ふ。移つて徑山に住するや、道法の熾なる事一時に冠たり。

衆常に二千餘人、皆諸方の俊又なり。故あつて衡州に寓せらるゝ事十年、此時先徳の機悟を蒐め、間に拈提を加へ、名けて「正法眼藏」と云ふ。孝宗帝の隆興元年叙す、壽七十五。○大悟十八度小悟數を知らず 禪師の著述中所々に引かれたり。されど、其何の書に出づるかを詳にせず。或は「正法眼藏」などに出づるか。今姑く疑を存す。○古へ二三綱の續を著く 綱とは、履はきもの二つを稱する語にて、即ち我が國の足袋一足（一そるひ）下駄一足などいふ足に當れり。故に二三綱とは、我が國の二三足の事なり。續とは、足袋の事なり。こゝに古へと云へるは、嘗てといふ程の意にて、病身なりし頃を指すなり。○馬齒 序釋中に云へるが如く、己が齡を云ふなり。○古稀 七十歳の稱なる事、序釋中に云へる所の如し。

云ふ事なかれ、鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て佗の上流を誑惑すと。是れ宿に靈骨

有つて、一槌に既に成ずる底の俊流の爲に設くるにあらず。癡鈍予が如く、勞病予に類する底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補ならんか。只恐る、別人の手を拍して大笑せん事を。何が故ぞ。馬枯其を咬んで午枕に噓すし。

○鵝林牛死の殘喘 鵝林とは、序釋中に云へるが如く、禪師の禪窟の異稱にて、既に屢出でたり。殘喘とは、餘喘、窮喘などいふに同じく、絶ゆるに近き氣息、或は死に近き生存の義なるが、こゝは後者の義なり。即ち松蔭寺に住める死に近き人間がといふなり。○無義荒唐 荒唐とは、廣大にして限なく、漠としてあてどなき言の義なり。「莊子」に、「謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭」とあり。されば、無義荒唐とは、道理無くして、廣大に

して漠然たるの義なり。○佗の上流を誑惑す、上流とは、學德優れたる人々を云ふなり。誑惑とは、たぶらかし惑はすなり。佗のとは、自分以外のなり。○宿に羶骨有つて 生得優れたる素質あつてとなり。○一槌に既に成ずる底の俊流 一槌に既に成ずるとは、「一槌便成」とて、一言の下に悟道徹底する事、俊流とは、才分すぐれたる人々を云ふなり。○勞病予に類する底 類する底と切りたるが、類する底の者と云ふべきを省筆せるなり。○只恐る別人の手を拍して大笑せん事を 卒然として讀めば、他の人も禪師の所説を妄談なりとして、手を拍つて呵々嘲笑すべしとの意なるが如く思はるれども、再讀して之を考ふれば、其れにては、「云ふ事なかれ云々」と云へる戒止の意氣と矛盾すべく、又次下の「馬枯其を咬んで云々」と云へる語句の意も解し難きに至るべし。然るに、こゝの句法に似たるは、既に序文の終末に、「禪門向上の事に到つて年來疑團あらん人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜あらん。何が故ぞ。月高くして城影盡く」と云へるあり、又「遠羅天釜」の贈遠方之病僧書の末尾には、「道ふことなかれ、鵝林老い去つて大に老婆禪を

説くと。恐らくは知音の一見して手を拍して大笑するあらん。何が故ぞ。不臨、亂不見、貞臣操、不臨、財不知、義士志」と云へるありて、特に後者の文句は、其句法意義、殆ど此處の文に近し。されば、この只恐る云々の意は、句中の別人の語は、知音といふ程の意にて用ひたるにて、癡鈍者流に少補あるべきは無論の事、猶恐らくは癡鈍者以外の知音の上流も、禪師の所説の大補あるべきを知つて、拍手歡笑せんかと云ふ意なるべきを知るべし。○何が故ぞ 何故知音の上流が拍手して讚歎すべきかとならば、其は例へば次の例の如き場合あればなりと云ふなり。○馬枯糞を咬んで午枕に喧すし 此は、山谷の「馬齧枯糞、謹午枕」といふ詩句を其儘に用ひたるなり。扱このに此詩句を假り用ひたる意は、騒々しき時に、馬が枯れたる豆殻（糞）を咬めばとて、誰も其音を感じず。併し晝寝時に馬が枯糞を咬めば、四隣が森閑として居る故に、枯糞を咬む音が非常に際だちて、午睡せる人の耳に非常に喧すしからんが、斯るつまらぬ枯糞の如きものすら、時と場合に由つては、大聲となつて人の耳に入るが如く、我がつまらぬ内觀の所説も、時と場合に由つては、知

音の耳に留る事なきを保せざる理なればなりと云ふなり。序文の結末と共に、一結實に千斤にて、而かも意味頗る深長、禪家の文の妙、是に至つて極れりと謂ふべし。

夜や船せん閑かん話な氷ひょう釋しやく
(終)

夜船閑話と白幽仙人

益者益其精
易者易其形
能益復能易
無益復無易

可名爲有益
是名爲有易
當得上仙籍
終不免死厄

寒 山 子

夜船閑話氷釋附録

夜船閑話と白幽仙人

「夜船閑話」は、白隱禪師の著書で、古來禪的長壽法の名著として、愛讀されたものである。其れも其の筈で、今日之を一讀して見ても、其所説が、全く今日流行する腹式呼吸法に一致する所があるから、古來本書の所説に依つて、實際無病長生の利益を得た人が少なくなかつたのであらうと思ふ。

本書の説く所は、本書の用語で云へば、内觀法といふので、息を腹

部に充たしめて、我が本性如何と観するのである。本書の用語を以て云へば、一身の元氣を臍下氣海丹田腰脚足心の間に充たしめて、我が本來の面目を觀するのである。尤も其觀じ方には、四段の階梯があつて、其事は本書の序文の中に表はしてある。即ち、

我が此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目何の鼻孔かある。

我が此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家郷、家郷何の消息かある。

我が此の氣海丹田、總に是れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴かあ

る。

我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説く。

といふのであるが（是等四則の意味は、序釋中に詳述してある）、此四段の觀想を繰返し々行ふのである。さうすると、其結果は、一身の元氣が、いつしか腹部に充足して、腹部が瓠然として鞠の如く成り、同時に諸病が悉く全治し去るのであるが、特に氣虚（神經衰弱）と勞役（肺病）に非常の効驗があるといふのである。

然るに、此方法の中には、肉體の諸病の治療法の外に、猶禪病を治

するといふ事が含んで居る事を注意せねばならぬ。此點が、今日普通の腹式呼吸法と稍異なる點で、従つて内觀法は、禪的腹式呼吸法と云はれねばならぬのである。さうして、白隱禪師は、何分宗教家であるから、此禪的方面に重きを置いて居られるのであるが、併しいづれの點に重きを置くかは、内觀法を活用する人の任意であるから、若し吾人が肉體の救済のみを以て満足しようとならば、其れも決して妨げないであらう。

内觀法といふものは斯ういふものだと云つてしまへば、頗る單簡であるが、併し斯ういふ方法が發明されるには、其材料となつたものが、

(153)

録附釋水話閑船夜

なかく少小ではないのである。さうして、其材料となつたものは、禪理と醫道と仙道（道教をも含めて）との三方面から來て居ると云つてよいのである。此事は、本書を仔細に一讀すれば、直ちに看取されるのであるが、先づ仙道及び道教の方では、「易經」、「老子」、「莊子」などが参考にされて居り、醫道の方では、主として「黃帝內經」に據つたのであるが、其他猶「醫宗必讀」や「相火論」や「褚氏遺書」なども参考にされて居り、禪理の方では、「阿含經」の用酥觀を根據として、其れに智者大師の「摩訶止觀」及び「小止觀」などを取り合せたのである。此は唯其主たるものゝみを擧げたのであるが、此外色々

参考にされて居るものも、要するに以上の三方面を出でぬのである。以上禪醫仙の三道に出入參酌して、練りに練つて研究案出されたものが、即ち所謂内觀法で、決して一朝一夕にして急ごしらへに拵へ上げた様な、そんなお龜末なものではないのである。

然るに、斯くの如くにして出来上つた内觀法は、白隱禪師自ら發明されたものと云ふと、本書の説く所では（本書以外のものにも、同じ趣に見えて居るが）、禪師自らの發明ではなくして、洛東白河の山中に住んで居つた白幽といふ仙人から傳受されたものだといふ事になつて居る。即ち本書の説く所に據ると、寶永七年正月月中旬（即ち禪師廿

六歳の時）、人の教ふるが儘に、白河の山中に白幽を訪ねて、上述の如き内觀法を傳受し、之を自ら潛修した所、當時自ら罹つて居つた氣虛勞役即ち神經衰弱肺病と禪病が、全く根治されてしまひ、のみならず、從來難解難入であつた禪理も、豁然として徹底悟入するに至つたといふのである。此所説を信ずれば、内觀法は、白幽仙人の發明（發明でなくても誰かゝらの相傳）であつて、「夜船閑話」は其筆記錄に過ぎぬ事になるが、併し此認信を確實にするには、是非とも一應白幽仙人といふ者の研究を試みねばならぬのである。仙人の研究といふ事は、其れ自身興味のある事でもあるから、以下少しく白幽の研究を試みよ

うと思ふ。

白幽子の事に就いては、既に二三考證を試みたものもある。閑田子の「近世畸人傳」には、「夜船閑話」の文を摘記して傳を作り、共に附記して、

私云、白幽子の始末、此外に聞く所なし。机上の書籍、儒釋道を兼ねたるは、傳大士に似て、しかも維摩の默に遊ぶ。英雄人を欺くにて、若其意を著さんために、かりに此人をまうけ、白川の幽人をもて名とせるもまた知るべからねども、年月などさだかに記されれば、こゝに録す。示す所の法は、實に人に益あるべし。

故に要をとりても猶繁きをいとはず。禪師爲^{ひとなり}人の志を嗣ぐのみ。

と云つたが、「續近世畸人傳」を編するに當つて、此人に就いて或材料を集むる事を得て、前編の増訂を試みたのである。其れによると、相州金澤の僧若霖の詩集「宜遊草」を、書肆竹苞樓が示した。其中に、訪^{ひら}白^く幽^く子^の詩二首がある。

秋興招 ^レ 吾 ^レ 泝 ^レ 白水	嵐光踏破訪 ^レ 幽踪
山村籬外一枝菊	石徑耳邊十里松
澗戸不 ^レ 厭遊客扣	岩扃只有 ^レ 懶雲封
遠來爲問山居好	冷露未 ^レ 晞鳴 ^レ 艸蛩

又

羨看幾時隱清時 獨倚石屏借晚曦
 一徑莓苔餘兔跡 半肩薪棘對仙基
 市寰日月本非別 洞裏景光稍似遲
 除却山中松柏翠 秋風搖落更無私

其後又竹苞樓が、白幽子自筆の作文を或人の藏して居たのを借り出して見せたとして、其を其儘に摹し出してある。其文は、

謹志箴

白幽子

夫長於雲壑青松下、無游觀廣覽之知、願有至愚孤陋之累、晏

然哀吾生之須臾。平日好讀書、不求甚解、窺聖賢之道、不慕榮利。安貧不蔽風日、一褐一瓢、屢空不憂。今日而俟天命而已。

といふのである。竹苞樓又白幽子の墓を探り得た。其は真如堂の北芝の墓といふので、方石に次の如く刻してあると云つてある。

表 松風窟白幽子之墓

横 白川山居隱士

背 寶永六己丑初秋二十五日

之に續けて、閑田子は次の如く云つて居る。

かよれば其人の實有は論なし。竹苞主人が此翁につきて重巖功あるもをかし。しかるに猶いぶかしきは、白隱和尚の訪れしは庚寅正月なること、前編に擧ぐるがごとし。墓碣は前年己丑也。若生存の日に建てしかともいふべけれど、二十五日とあるは、其歿日なるべきことわりなり。畢竟隱士の名をかりて、丈山の師也、壽二百歳にも過ぎたらんなど、仙のごとく取りなして、其示説を神にせらるといはんか。あるひは老後とし月の空記得のまゝに録したまふといはんは難なし。猶世によく識る人もあらん。

此年代の齟齬は、大に注意を要する點と思ふが、此は後に至つて解決

を試みようと思ふ。

然るに、馬琴は、「玄同放言」の中に、白幽子異傳と題して、自分が享和年間に京攝の間に遊んだ時、「雪齋紀事」といふ古寫本を見た。其中に白幽子の事が書いてあつたのを記憶の儘書きつけると云つて、次の如く記して居る。

雲齋云、予總角の比、家兄に俱して白河なる白幽子を訪ひしに、世には仙人の如くいひしかども、見ると聞くとは異なり。坐邊に土鍋など取りちらしたれば、火食もするなるべし。その素生を問ひしに、石川丈山先生に使はれし僕なりきといひき。わが兄詩を

作りて示しよに、和韻も出來ず。文字篇なき人と見えたり。坐右には三重韻一卷の外、藏書もなかりしと云へり。又云、白河のほとりにて、彼老人の事を聞きしに、白河村にて、年忌などあるをりに招きよすれば、歡びて來ざる事なし。飲食など常人と異なることもあらず。衣類の破損するときは、村里に出でよ、乞ひ受けて着用せしとぞ。

馬琴は、以上の記事に續けて、閑田子の記事を摘記して、自分の見解を附け加へて居る。

馬琴も「させる隨筆ならねども白幽子の事は實録なるべし」と云ひ、

閑田子も「かゝれば其人の實有は論なし」と云つて居る如く、白幽は決して烏有子ではなく、實在の人である事は、最早疑を容るゝ餘地がなからうと思ふが、併し其素生に至つては、依然として捕風捉影の感がある。然るに、「鑑定便覽」には、白幽を書家として收めて居つて、其記事は大體閑田子の記事に似て居るが、併し多少異なる所もある。即ち次の如くである。(坐右に同書がないから、姑く「大日本人名辭書」の所引による)。

白幽は書家なり。(中略)。石川丈山の師友なり。(中略)。其筆跡甚だ稀なり。偶々あるものは八分字なり。筆法超凡にして、

實に仙境の人の筆跡や此の如しと思はる。寶永六年八月九日寂す。其の享年長壽にして、齡數を知らず。或は云く、二百餘歲なりと。或は云く、實は其の寂年詳ならず。寶永六年となすは、白川の山中を出し年なりと。

是によると、「畸人傳」の記事に異なるのは、其歿年の月日と、寶永六年を以て、白川の山中を出た年時とする一説とである。然るに茲に、今一つ白幽に就いて異傳を傳ふるものがある。其は、白隱の弟子の東嶺圓慈の著はした「白隱年譜」(具さには、龍澤開祖神機獨妙禪師年譜因行格)の記載であるが、同譜寶永七年の條に、白隱禪師が白幽真人

を訪ねらるゝ事を記して、其白幽真人の註として、次の如く記して居る。

未詳姓氏、幼事石川丈山。因病辭、求養生之術、年及弱冠、遇一異人、受嫵蘇法、獲鍊丹方、入山而隱、居無常處。比至古稀、暫住石氏隱棲詩仙堂、遂卜容膝地於白河山中、以爲憩息處、住數十年、不知其所終焉。後於若州山中、而有逢人云。白河石匠某甲語予曰、白幽真人、曾告我父、要求岩洞。父語幽曰、我剛石處、深穿似窟、若可意居焉。幽往爲居也。或請饗宴、或呈時菓、問候不絕。壽近九十一而

逝。書軸間在。今考、先師夜船閑話、言「石氏師範而保三百壽者、暗記失耳。依此論誤、有爲以下以先師好偶言一人上之誚也。予先在京時、普討幽之事、始至白河之石匠某甲處、得其實也。」

東嶺は、白隱門下第一の高足で、又京都に上つて、白川の邊に幽棲して病を養うた事もある人であるから、多少師匠を辨疏する恐がないではないが、而かも最も信實に近き材料として受け取る事が出来ると思ふ。さうして、是を以て彼の「雪齋紀事」の所傳に比べるに、大に契合する所のものがあるのである。彼には丈山の僕であつたというて居る

が、此にも同じ趣に云うて居る。又彼に、招けば来て飲食するとか、衣類を村里に出て乞ひ受けるとか云うて居る點も、此に、石匠に乞うて岩居を得たとか、饗宴に請じたり時菓を呈したりしたなど云うて居る點と符合する。唯彼と此と異なる點は、彼は飽くまで凡人として傳へて居るに對して、此は一種の隱士として傳へて居る事である。併し「雪齋紀事」に飽くまで凡人として傳へて居る事も、聊か疑なきを得ぬ點がある。雪齋の兄が詩を作つて示したけれども、其れに和韻も出来なかつたと云うて居るが、一體其示した詩が、果して秀拙いづれであつたか抑も疑問で、其等の爲めに其時には和韻をしなかつたのかも

知れず、特に坐右に「三重韻」があつたとあるから、寧ろ反對に、作詩の技倆を全く否定する事が出来ない譯ではないかとも思はれる。又、圓慈も認めて居る如く、仙人ではないので、隱士であつたのであるから、火食もするであらうし、従つて土鍋があつたとて何も不思議はないのである。唯雪齋の調査の、圓慈の調査に異なつて居るのは、是が即ち白幽の隱士たる所以で、隱士特にさまで有名でない隱士にあつては、時と場合で色々な風に見られたり傳へられたりする譯であらうと思ふ。然るに、猶一つ「紀事」と「年譜」とに於いて注意を要する點は、白幽の年齢の事である。「年譜」には、終る所を知らずと云ふと

共に、九十に近くして逝いたといふ石匠の談をも掲げて居る。若し石匠の談の九十歳死歿の説によつて、丈山との關係を考へて見ると、丈山は、寛文十二年に九十歳で歿して居るから、白幽の歿年を假に寶永六七年頃とすれば（歿年の事に就いては後に説く）、丈山より五十歳の年少である（寛文十二年より寶永七年迄は、三十九年間であるから）。されば、幼にして丈山に事へたといふ傳も理に適ふ事となる。扱「紀事」の方には、年齢の事は見えて居らぬが、馬琴の云ふ所によると、同書には、主として寛永年間の事が書いてあるといふ。寛永は廿年間あつて、其末年から寶永七年迄は六十八年間であるから、當時白幽が

四十歳であつたものとしても、寶永七年迄には百八歳になる。されば、此點の齟齬を調和せしめるには、「紀事」の中の記事には寛永以後の事もあるものと認めるか、或は「年譜」には、白幽は幼にして丈山に事へて、病を得て辭して、弱冠に及んで一異人から嫺蘇の法を受け、鍊丹の方を得て、山に入つて隠れたとあるから、恰も白隱禪師が廿六七歳で鍊丹の法を得たやうな形で、廿幾歳頃既に山に隠れた事となり、さうして雪齋等の行つた時は、まださまで年を経なかつた時であつたとすれば、以上の齟齬は解決出来るのである。いづれにしても、九十歳内外の長命者であつた事は、殆ど疑ない所であらうと思ふ。

(171)

録附釋氷話閑船夜

以上述べた如く、「年譜」の記事は、大體に於いて最も信實に近いものと思はれるのである。勿論仙人ではなく、隱士であるが、洞穴に住んで居たのが事實ならば、其形が恰も仙人に等しいから、人が仙人と云つたのも無理のない話である。丈山から辭し離れたのが、年少の時であるらしく、其れから山に隠れたのであるから、學力とても取り立てゝあつたらうとも思はれぬが、併し何分丈山の薰陶も多少は受けて居たらうから、まんざら文字を知らぬ如き者でもなかつたらうと思ふ。竹苞樓主人の見出したといふ「謹志箴」は、大體陶淵明の「五柳先生傳」に模擬したもので、文句まで其儘假用して居るのであるが、

併しこゝらが却つて上來の白幽觀に調和する様に思ふから、自分は寧ろ彼れの眞作と信せんとするのである。又其が書いてあつた書體も、「年譜」に書軸間々在りとあるに鑑み、又「鑑定便覽」の記載にも鑑みて、眞蹟であつたと傳ふる如くに、彼れの眞蹟であつたものと信せんとするのである。今「畸人傳」に摹載するものゝ中から、一二字をこゝに摹すると、

雲 峯 青 松

斯の如き字體であるが、「鑑定便覽」に、「筆法超凡にして、實に仙境の人の筆蹟や此の如しと思はる」とある評は、稍過褒かも知れないが、併し當つて居ると思ふ、然るに、「年譜」の記す所では、上述の如く、自ら病に罹つたが爲め養生の術を求めて、一異人に遇うて嫵蘇の法を受け、鍊丹の方を獲たといふ事である。此事は、之を信する迄には聊か距離のある事實であるが、併し前後の事情から推して、養生の術を求めて歩く間に、誰かゝら「阿含」中に斯んな法(即ち嫵蘇の法)があるといふ事を聞いたといふ事が、決してないとは斷言されぬのみならず、寧ろ有り得た事と想像するのが合理的であらうし、よし又其

は兎も角もとしても、兎に角養生鍊丹の法を心得て、其れに由つて九十歳前後まで長命した隱士であつた事は、之を想像するに難からぬ事と思ふ。

以上述べた所に由つて、白幽子の真相は大抵明かになつたと思ふ。是に至つて若霖の詩を熟誦すると、益彼れの面目が躍如として来るやうに思はれる。扱是に至つて、白隱禪師との關係を攻究して見る必要が起つて来るが、禪師が白幽を訪ねられたのは、「夜船閑話」に記される所では、前述の如く寶永七年正月中旬で、其時の白幽の齡を記しては、「夜船閑話」には、三四甲子とあるから、百八十歳乃至二百四

十歳といふ事になるし、「遠羅天釜」の答鍋島攝州侯近侍書には、既に明かに二百四十歳となつて居り、「鍊丹秘要」には、三百七十歳となつて居て、且つ三書共に丈山の師範であつたと云ふ事になつて居る。此は恐らく禪師が方便として誇張されたものであらうと思ふ。なせなれば、年壽が後の著書程増してあるなどを見ても、實事として書かれたものでない事は、略想像し得るからである。扱其れにして、寶永七年に禪師が白幽を訪ねられたといふ事は、然らば事實であらうか。「年譜」には、丈山の師範で三百歳といふ事は、暗記の失として否定して居るが、而かも寶永七年往訪の事は、事實として認めて居る。併

し是に就いて、第一に不審なのは、墓。礎。の。年。時。と。の。矛。盾。で。ある。墓。礎。の。寶。永。六。年。を。歿。年。と。し。た。な。ら。ば、禪師は白幽の歿した翌年に訪ねられた事になる。唯茲に此矛盾の解決を試み得るのは、「鑑定便覽」の寶永六年を以て白川の山中を去つた年となす説で、其れも禪師の逢はれたのはやはり白川山中であるから、此去つたといふ意味も、眞如堂の傍を去つて猶山深く入つたといふ意味に取るより外ないのである。然るに、明和三年（禪師の歿前三年）に成つた「鍊丹秘要」には、禪師の訪ねられた其年（即ち寶永七年）の夏、白幽が谷に落ちて岩に觸れて死んだといふ事を、來住の一僧が云つたといふ趣になつて居る。併

し此は前後の語調などから見ても、強ち此年時を信せねばならぬ事とも思はれぬから、唯白幽の死を認めたと解して置けばよいと思ふ。然るに、茲に今一つ矛盾の事實として注意を要するのは、「壁。生。草」の中に記された心火逆上の年時との矛盾である。同書は一名を「鵲林自傳」とも云つて、即ち禪師の自叙傳であるから、同書中の記事は、最も信を置くに足るのであるが、同書下巻の記す所によると、禪師の心火逆上の難病に罹られたのは、信濃飯山の正受菴を辭して、歸國して沼津大聖寺に老師息道の病に侍して居られた時の事で、其年時は同書には記してないが、「年譜」の記す所に對照して見ると、正に寶永

八年即ち正徳元年の十一月以後の事に屬するのである。而かも同書には、越えて六年即ち享保元年十一月（「年譜」に由つて此年とする）に、故山なる松蔭寺に歸つてから、内觀の功に依つて、従前多少の病腦が、底を拂つて平癒したとは書いてあるが、白幽の傳授に依つたといふ事は、更に記してないのである。されば、「壁生草」の記事を其儘に信ずれば、正徳元年以前に難病に罹つて白幽を訪ねられたといふのは事實ではなく、假に白幽を訪ねられたものとしても、其は正徳元年から享保元年に至る六年間の間の事ではなくてはならず（従つて白幽の歿したのも、正徳元年以後の事になるが）、而かも其は事實として認むべき材料がないと云ふ事になるのである。斯うなると、「年譜」の寶永七年往訪説とも齟齬して來る。併し圓慈が「壁生草」を見て居りながら、而かも斯ういふ記事を書いたのは、全く「夜船閑話」を始として、其が其儘「闡提記聞」にも取られ、猶「遠羅天釜」にも「鍊丹秘要」にも同じ趣になつて居るから、此記述を變改するに忍びずして、敢て寶永七年の事として譜を立つるに至つたものであらうと思ふ。斯く思はるゝ譯は、「年譜」に白幽が内觀修養の訣を授けたとある所に、「口訣出ニ夜船閑話」と特に注記して居るのを見ても略推し得るからである。然るに茲に、禪師が白幽を訪ねられたとすれば此時であらうかと思

料がないと云ふ事になるのである。斯うなると、「年譜」の寶永七年往訪説とも齟齬して來る。併し圓慈が「壁生草」を見て居りながら、而かも斯ういふ記事を書いたのは、全く「夜船閑話」を始として、其が其儘「闡提記聞」にも取られ、猶「遠羅天釜」にも「鍊丹秘要」にも同じ趣になつて居るから、此記述を變改するに忍びずして、敢て寶永七年の事として譜を立つるに至つたものであらうと思ふ。斯く思はるゝ譯は、「年譜」に白幽が内觀修養の訣を授けたとある所に、「口訣出ニ夜船閑話」と特に注記して居るのを見ても略推し得るからである。然るに茲に、禪師が白幽を訪ねられたとすれば此時であらうかと思

はれるものがある。其は、「年譜」の正徳三年の條に、禪師が定山和尚の發起に係る勢州山田の虛堂會に參し、其れから京都に向はんとし、途に妙喜の荷葉團々の頰に入得し、爲めに日向の古月和尙を訪ねようと思つた志を變じて、若州に向つた。其途に白河の茶店に息んで、一貴童が鶯の音に寄つて其聲韻を學ぼうとするのを聞いて、大に發奮するといふ一段がある。其れから若州の圓照寺に至つて鐵道に侍したといふ事になつて居るが、此事は、「壁生草」にも出て居る事であつて、唯往問の順序が多少異なつて居るが、此は、伊勢から和泉に出で、其れから京都に出で、其れから黒谷、白河を経て、若狹の小濱に出た

とある「壁生草」の順序の方を信憑して置く方が正當であらうと思ふ。

「壁生草」の記す文によると（「白隱廣録」中の和譯のものに據る）、

餘方は何づれ指し置いても、遠ら近ち知らぬ法の道、進む心は若狹地や、人の心は黒谷の、磨けばいつか白川や、浮きつ沈みつ笹小舟、焦れ行く身のしほもなや、小濱にこそは廻り行く、さてあるべきにあらざれば、そこから尋ねて尾崎なる、圓照古寺に著きにけり。

とある。此文と「年譜」の記事とを並せて、「夜船閑話」の「黒谷を越え、直に白河の邑に到り、包を茶店におろして、幽が巖栖の處を尋

ぬ」とある文に比べると、大に契合する所のものである。のみならず、此翌年には、昨年泉州の惠極老師が、「禪病は醫治せんと欲すれば轉々重る。最も寂靜の處を尋ね、此山の草木と共に朽ち果てんと、死に到るまで諸方に奔波すること莫れ」（「壁生草」）と指南された所に従つて、美濃の管谷山中に寂靜の處を求めんとした事があり、其又翌年即ち正徳五年には、同國岩瀧山に隱棲して、惠極の指南を實行し、大に得る所があつて、

身心堅固又勇壯、夜禪晝誦決して怠らず、其中間の大悟小悟、**喜踊躍數を知らず、妙喜の所謂大悟十八小悟數を知らず**といふも

の、今に於て疑なきに至る。

と記されて居る。此段も「夜船閑話」の末段に符合するもので、大に注意を要する點かと思ふ。其れから、其翌年の享保元年の十一月には、故郷の松蔭寺に歸住するのであるが、そこで、

一枚の青竹籠を設け、其中に入り、**内觀と禪觀と合せ並べ修す。貴ぶべし、内觀の功に依り、従前多少の病惱底を拂つて平癒す。**

清閑瀟洒、岩瀧に在りし日より遙に勝れり。

とあつて、而かも内觀の大略に至つては明日之を説かうと結んであつて、其如何にして此法を得るに至つたかは明かしてない。